
幽霊と結婚！？

しんや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊と結婚!?

【Nコード】

N7742B

【作者名】

しんや

【あらすじ】

世間一般からみた不良生田慎いくたしんはある日幽霊を見えるようになりそれどころか許嫁にされてしまう。そんな不幸な少年の物語です。

第1話：出会い！

2004年7月某日俺の運命が変わった。

AM10..00

あゝねみい。約束まであと30分か…とりあえず着替えるか。

タッタッタッ

ん？誰かいんのか？

タッタッタッ

今日は誰もいないはずなのに。

おれは寝ぼけながらもそんなことを考えていた。すると…

「あはははは！源さんサイコー！写真に写ったら魂抜かれたって！あはははは！」

誰！？源さん！？ってか誰の声！？

「しかも芋って！あははは！」

芋！？

ってか芋と写真になんの接点があんの！？こいつらなに！？

おれは護身用に木刀をもって声の聞こえる居間へ行った。

「源さんまぢいいいキャラしてるよ！こんど私も試すね！」

居間へ行くと俺と同じくらいの女の子が立っていた。あっ！ちなみに俺はいま高1だから。

そして俺は木刀握りしめ居間入った。

「てめえ！人ん家でなにしてんだあ！？」

「あっ！やっと起きたの！寝過ぎると馬鹿になっちゃうぞ」

女がケラケラ笑いながら言っていた。

誰！？ってか体が若干透けてませんか！？

「ほくら寝ぼけた顔してないでシャキツとする！」

「あんた誰ですか？」

「私？わたしはあゝ舞花、田辺舞花だよ！君は生田 慎くんだよね！？」

はい。その通りです。なんで知ってんですか！？これは警察に通報すべきなのか？

「あゝあと最初に行っとくけど私幽霊だから！」

はい？いま幽霊って言った？この子？暑さで頭やられちゃったか？

「念のため聞くけど幽霊ってあの死んだ人になるあの幽霊のこと？」

「そっ♪その幽霊だよ♪」

「はあああ!？」

ヤバイ!マジでヤバイ!確かに体透けてるしよく見たら浮いてるよ!

「うわああ!なんまんだぶなんまんだぶ!」

「はいはい。そんな聞かないから。ちょっと話し聞いてくれる?」

「いやいやいや!お前幽霊なんだから効けよ!」

「黙れないと呪うよ?」

フッ……そのまま気絶しました。

第2話…ちょっとまてえ！

気が付くと居間で寝ていた。

ああ夢かあ。変な夢みたなあ。

「あははは！タモさんまち最高！」

！？いたー！夢じゃなかった！

「あっ！気がついたあ？ってか友達と約束してたんじゃないの？」

……………12時？やっぱあ完璧遅れた！どうしよう！

「とりあえずもう間に合わないんだし電話して断ったら？私の話しもきいてほしいし♪」

……確かになあ。こいつの話し聞きたいし、断ったら呪われそうだし。

「わかった。電話してくるから待ってろ。」

「はいよお♪ごゆっくりい♪」

とりあえず部屋に戻り携帯でツレの茂に電話した。

「もしもし？シゲかあ？」

「てめえいまどこにいやがる！？油うつてねえで早く来やがれ！」

「わりいけど今日ちよつと体調わるくていけねえや。わりいな。」

「は？おまえが？珍しいこともあるもんだ。まあいいやわかった。大事にな。」

こいつ切り替えはやっ！

「ああ。わりいな。じゃあな」

そういつて電話をきったあと幽霊のいる居間へ行った。

「お帰り♪って大丈夫なの？」

「ああとりあえずな。んでおまえはここになににきた？」

「んゝ暇潰し？」

帰れバカ幽霊！

「わあゝ！うそだって！顔怖いよ慎くん！」

早速慎くん！？こいつどんだけ馴れ馴れしいんだ！？

「たっだいまあゝ」

このアホ声は……親父？

「おおゝ慎！いたのか！おまえ出掛けんじゃなかったのか？」

相変わらず能天気だな。ってかなんだこの落ち着きのねえ40代。

「ああちよつとな。」

「んで慎そちらのお嬢さんは彼女か？」

はい？こいつがみえてんの？いやこのダメ親父が見えるはずがないよな。うん偶然にきまつてるな。

「私田辺舞花でえす！よろしくお願いします♪」

おまえも普通に自己紹介するなああああ！

「おおーこれはこれはご丁寧に！おじさんは慎の父親の生田弘毅でえす！」

「ちなみに私幽霊です♪」

おい！バカ幽霊簡単にゆうな！

「うん！見て分かる！」

は？見て分かる？

「親父……つかぬことを聞くが幽霊とか見えるのか？」

「おう！ばっちし！」

殺すぞクソ親父！

「ちなみに舞花ちゃんはお前が子供のころからうちにいるぞ！」

はい？じゃあおれのしてたことみんな知ってたってこと？じゃあな
んで自己紹介したの？

「あとおまえの許嫁ってことになってるからな！」

ちよつとまてえええ！

第3話..あんた何者!?

時刻はもう夕方4時あれから4時間たっていた。

「なあゝ慎そろそろ機嫌直してくれよ?」

「ああ!?!だれのせいでムカついてっとおもってんだ!?!」

あれからおれは親父をなぐったり蹴ったり殴ったりしてた。

「慎くゝん。そろそろおじさん死んじゃうからやめてあげなよおゝ」

おまえがゆうな!

「大体よお幽霊が許嫁聞いてキレねえほうがおかしいだろ!?!」

「あゝひどおい!差別だ!同じ人なのにい!」

おまえは死んでるだろ!

「そうだぞ慎!舞花ちゃんとはちゃんとした人間だぞ!」

それは生前の話しだろ!

疲れるこいつら二人の相手は。

「ただいまあゝ!」

あの声はお袋!やっともな人間が帰ってきた!

「お袋！助けてくれ！」

「どうしたの慎？」

「親父が幽霊と喋ってしかも俺の許嫁とか抜かしてやる！」

「あら〜慎も舞花ちゃんが見えるようになったのねえ〜よかったわねえ！」

ぐはああ！あんたもかい！

「お袋も見えんの！」

「そりやお母さんの家系もお父さんの家系も霊媒師の血筋だからねえ」

初耳ですよ？お袋さん？

「とりあえず居間で全員で話しましょ！」

10分後お茶を持ったお袋が居間にきた。

「とりあえず初めから全部話せ！」

おれは親父達を睨みながらいった。

「ん〜まあとりあえず舞花ちゃんは慎の許嫁だ！」

「そうなった理由を話せといっとんじゃあ！」

「私が慎くんに惚れたからでえす♪」

成仏しやがれバカ幽霊！

「知るかぁ！なんで幽霊と結婚しなきゃいけないんじゃないんじゃあ！」

「落ち着け！慎！話をきけ！結婚はちゃんとできる！」

は？相手は幽霊ですよ？触るところかほとんどのやつは見えないんだから無理だろ！とうとうボケたかクソ親父！

「母さんあれを！」

「はいはい」

お袋が持ってきたのは一枚のお札だった。

「はい。舞花ちゃん。」

「これを持ってなさい。」

幽霊が持つとの体のはっきり見えるようになった。

「これは父さんのご先祖様が作った反魂の札とゆうものでな幽霊に持たせると体が戻るというありがたいものだ！」

いやいやおかしいでしょ！漫画じゃないんだから簡単に生き返るって！

「やったあ！慎くんこれで結婚できるよ！」

幽霊が嬉しそうに飛びついてきた。

「アホかぁ！おれが良いって言わなきゃ結婚できないだろ！ってかするつもりはないぞ！」

「慎に拒否権はない！」

慎は精神に9998のダメージを受けた。

慎はブチキレた！

「ざっけんなぁ！勝手決めといて拒否権はねえってどうゆうこった！？」

「慎くん暴れちゃだめ！これ以上暴れるなら……呪うよ？」

「すみませんっしたぁ！」

こいつこわっ！やべえよ！今なんか変な冷たい空気流れたよ！

「とりあえず体があっても戸籍がねえだろ！なきゃ結婚はどっちみち無理だろ！」

「そこらへんは大丈夫だ！父さんの人脈を使う！」

あんたそこらへんのリーマンだろ！

親父は携帯をとり誰かに電話し始めた。

「もしもし？純ちゃん？おれおれ！」

オレオレ詐欺！？

「あゝそうそう！ちよつと頼みあんだけどさあゝ戸籍一つ作ってくんね？」

できるかああ！

「えっ！？むりだって！？」

そりゃそうだろ！

「歌舞伎町のことマスコミにばらすよ？」

歌舞伎町でなにがあったの！？

「えゝいいのお？ありがとね！ちなみに3日以内に出来なかったらマスコミにばらすから！」

出来るの！？ってか親父は悪魔か！？

「舞花ちゃん明日には出来るって！誕生日そのままでもいい？」

「いいですけど誰に電話したんですかあ？」

そうだよ！戸籍作るなんて普通はできないだろ！

「んゝ純ちゃんだよゝ」

「純ちゃんて誰ですかあ？」

「やだなあ！総理大臣の小○純○○に決まってるじゃん！」

は！？総理大臣！？あんた何者ですか！？ってか総理大臣が秘密握られんなよ！

「ほんとですかあ？おじさんすごいい！」

それですますの！？こいつすごっ！

「お父さんあまりいじめちゃダメですよ！あの人だって大変なんですから！」

さすがお袋この家で一番まともだ！

「ばらすなら警察にしときなさい！」

ちがうだろお！ってかもうそこまで来ると確実に犯罪だよね！？

「あいつはこれくらいしないとやらないからいいの！」

いや警察の方がまずいよね！？

「まあなにはともあれ体もある戸籍もある！これで慎も文句ないだろ！」

もうおれはあきらめた。もう好きにしてください。

第4話：買い物！

ピッピッピッピッピッピッ！

朝かあ

「起きろお！ 慎くん！」

「んあ！？」

舞花の声とともに腹に衝撃が突然きた。

「ほらあ！ はやく起きなよお！ それとももう一発喰らいたい？」

「わかった！ おきる！ だからやめっ！ ぎゃあああ！」

いいおわらないうちに舞花の拳が腹にクリーンヒットした。

おれいつか殺されるかも：

「私は先に居間に行ってるね♪ 慎くんも早く来なよ♪」

そのままどっか行け！ バカ幽霊！

俺はまだ痛みの残る腹をさすりながら居間へ行った。

「慎くん！ 早くご飯食べて出掛けよ♪」

「あゝわかったから少しテンション下げろ。」

「むりい！私のテンションはこれが普通だから♪」

「そうですか…まあとりあえず食ったあと準備があるからまだかかんぞ。」

「わかってるって♪とにかく食べよ！」

「はいはい。」

「いったきまあす！」

はあゝめんどくせえ！えっ？なんで出掛けるかって？それは昨日夜にさかのぼる……

——— 昨晚PM10:00 ———

「慎。明日舞花ちゃんの服一緒に買ってきてなさい。」

「やだ！」

「行かないと古賀流滅殺呪術かけるわよ？」

こわっ！あんたも呪うんかい！しかも滅殺って！死ぬじゃん！

「行かせて貰います！」

「んっ。よろしい。」

なんでどいつもこいつも呪いをつかえんだよ！？おかしくないか！

「あんたの許嫁なんだから自分で誘いなさいよ！」

「はああ！？なんっ！」

カッ！言い終わらないうちに俺の横の壁に包丁が刺さった。

「返事は？」

「はい…」

お袋こわ！普通包丁なんか投げねえだろ！下手したらけがしてんぞ
！？

そして俺は幽霊の部屋に行った。俺の部屋の隣の空き部屋を使うらしい。

ドアを開けると机にクローゼットに本棚それにベッド必要な物は全部あった。

どっから湧いて出てきたんだか。

ベッドに寝転がっていた幽霊が俺に気付いた。

「あっ！慎くん！どうしたの？」

テンション高えなあ。

「明日おまえの服買いに行くぞ。」

そうゆうと幽霊は目を輝かせた。

「ホントに！？やったあ！慎くんとデートだあ♪」

「んじゃそれだけだ。」

「えゝそれだけえ？」

他になにしろと！？

「ああそれだけだ。」

「キスとかしてくれないの？」

バシッ！俺は幽霊の頭を叩いた。

「慎くんのいじわる！慎くんなんかピーーになっちゃえ！」

えー！？殴っただけで放送禁止用語！？おまえと喧嘩したら何言われんだよ！？

「あと私のこと幽霊じゃなくて舞花って呼んでね♪じゃなきやカラスに毎日つつかれる呪いかけるからね♪」

しよぼ！なにそのしよぼい呪い！

「わかったからかけないでくれ。」

「じゃあ今呼んで♪」

「舞花。」

「んふふ♪なあに慎くん♪」
いや呼べって言われたから呼んだんですけど!?

「別になんもねえよ!」

そういつて部屋を出た。

そして今に至る……

——— 現在 ———

「慎くんあそこで服買お!」

「はいはい。走ると転けるぞ!」

「大丈夫大丈夫♪ほら早く♪」

そうゆうとある店に入っていた。

——ピンキーフライ——

なにこの名前!?! ネーミングセンスなさすぎだろ!?!

「いつみてもいい名前だねえ」

いや良くないだろ！

中に入ると店全体がピンクで目がいたくなった。

なにこの店！？明らかおかしいだろ！？店員なんかメイドみたいな服着てるし！

「あっ！このスカート可愛い！これもいいなあ！」

店内を物色したあと大量の服を買い店を後にした。

その後も服やアクセサリーの店を10件以上つれまわされ美容院で2時間拘束されようやく解放された。

美容院からでてくると舞花の黒髪は綺麗な栗色に染まり背中まであった髪は肩ぐらいいまで短くなっていた。

こうみるとこいつも可愛いよなあ。

「えへへ♪どう似合う？」

「ああ。いんじゃねえの？」

「慎くんほめられたあ♪」

「よしっ！帰っか！」

「うん♪またこんど行こうね♪ピンキーフライ♪」

絶対いやだああ！

第5話…ふざけんなあ！

「慎、話があるから舞花ちゃんを呼んで居間に来なさい。」

いつになく真面目に親父が言った。

一体なんだろう？

「おい舞花入るぞお？」

「いいよお」

扉を開けると見知らぬじい様と舞花が喋っていた。

ボタン！今なんかいたよな！？気のせいだよな！？あんなじい様うちにはいないしな！

そんなことを考えながらも一度舞花の部屋に入った。

！！！？やっぱりいる！？

「誰ですか！？」

「この人はあ私が霊界でお世話になった源さんってゆうの♪」

ああ〜そうですかあ♪って知るかああああ！

「ほらっ！慎くん突っ立ってないで挨拶しなよ！」

いや挨拶って言われても。

「初めまして写真撮った瞬間心臓発作起こして助かったもののその後芋を喉に詰まらせ苦しみながら死んだ源三です。」

いやそんな長くていやな自己紹介いらないよ源さん！悲しくなるからやめようよ！

「あははは！源さんそれマジウケる！あはははは！」

人の死を笑うなああ！！

「あつ。初めまして生田慎です！」

「知ってるぞお。舞花ちゃんの許嫁だろう？舞花ちゃんもいい男選んだのお〜」

「あつ！そうですかあ！いい男なんかじゃいですよお！」

「舞花ちゃんが認めたんだからいい男に決まっとる。」

確信！？

「舞花ちゃんをよろしくのお〜」

ああ幽霊だけどいい人だよこのじい様！どっかのバカ二人も見習ってほしいよ。

「慎くんこれだけは言っとくぞお。……………舞花ちゃん泣かせるようなことしたら地獄に落として死ぬより辛い目にあわすぞ！」

いやあああ！！この人一番恐ええよ！さっきと口調と目付きが変わってるよ！

「源さんはもともとあっち方面の人だから怖いよお」

早く言ええ！また気絶しそうになったじゃねえか！

「はっはっはっ！生前は首切りの源三と呼ばれてたからのお！」

恐っ！！5話目にしてまさかの最強人物登場！？

「そうですか……たっ大切にします…」

「じゃあわしは帰るかのお。」

「うん♪またね源さん♪」

「ではまた会おう！」

「あっ！はい！気をつけてくださいね！」

そうゆうと天井から出てきた光の中に源さんは笑いながら消えていった。

「あゝ面白かった♪って慎くんなんか用あったんじゃないの？」

「あゝそうそう親父が俺と居間に来いだってさ。」

「おじさんが？んじゃ行こうか！」

俺達は部屋をでて居間に行った。

「おじさんどうしたんですかあ？」

「おおゝ来たかあゝ」

いつもの親父に戻ってるよそんな重要な話しじゃないのか？」

「えゝウォッホン！」

咳払いをすると親父はとんでもないこと言い放った。

「父さんは会社の転勤で3年ほどインドネシアに行くことになった
！」

はい？いまなんて言いやがったこいつ？転勤？インドネシア？

「それで母さんもついてくるから3年ほど二人で留守番を頼む！」

ええええ！？

「ふざけんなあ！てめえ許嫁とかふざけたこと言ってから一週間経
ってねえのに今度は二人で暮らせだあ！？ふざけんのもいい加減に
しやがれ！」

「ホントですか！？おじさん！？二人で暮らしていいんですか！？」

喜ぶなああ！バカ舞花！

「おじさんが許そう！そして慎！おまえに拒否権はない！」

てめえクソ親父！インドネシア行く前に地獄に行かすぞ！

「ちよっ！お袋もなんか言ってやれよ！」

「帰ってくるころには孫の顔見れるかしらねえ？」

お袋！？

「はいっ！私がんばります！」

がんばるなああ！ってかつくるき満々かい！？

「親父いなくなったらこいつが学校いくアテどうすんだよ！？」

おれはなんとか引き留めようと必死だった。

「大丈夫だ！昨日慎の学校の校長に電話して編入の手続きはし
いた！あとは書類を書くだけだ！」

「普通もつと試験とかあるだろ！？」

「校長がヅラだと学校中にばらすぞと脅したら一発で解決した！」

校長おお！あんたヅラだったんかい！

「金とかはどうすんの！？」

「私が霊体になって銀行から盗んできまあす！」

犯罪じゃねえかああ！

「大丈夫だ！仕送りはする！」

「慎ももう諦めなさい。もう決まったことなんだから。」

「いつから行くの！？」

「明後日だ！」

くたばりやがれクソ親父！

そんなこんなで俺と舞花の二人暮らしが決定した。ついでに同じ学校に通うことも。

誰か助けてくれええ！！

第6話：舞花の料理！（ナポリタン）

「じゃあいつてくる。」

「慎、舞花ちゃんちょっと行ってくるわね。」

ちよつとじゃないだろ！

あれから2日経ち親父達が出発する日になった。

「いってらっしゃい！おじさん！お婆さん！」

「舞花ちゃんいつてくるねえ」

「妊娠したらすぐ報告しなさいよ！」

「はあい♪」

「いや作るつもりないから。」

「慎！男は時として獣になるべきだ！」

息子になんちゆうこといつてんだああ！クソ親父があ！

そんなこんなで親父達はインドネシアにいった。

—————PM1..00—————

「慎くん！今日のお昼ごはんは私がつくるね♪」

「舞花作れんのか？」

「任せといてよ♪これでも生きてた頃は料理で国一つ乗っ取れる女って言われてたんだから♪」

スッゴいやな予感するんですけど……

「食べたらみんな美味しさのあまり失神しちゃうところからついたんだ♪」

ヤバイ！こいつの料理は絶対ヤバイ！

「それは不味さのあまりの間違いじゃなくてか！？」

絶対そうに決まってる！おいしくて失神なんて聞いたことねえよ！

「違うからあゝあんま失礼なことゆうと源さんに泣きつくよ？」

「食べさせてもらいます…」

源さんだけはやだぁ！生前のあだ名からして絶対ポン刀もってくるよ！

「じゃあすこし待っててね♪」

そう言うとき舞花は走ってキッチンへ向かって行った。

———30分後———

「出来たよお！今日はナポリタンだよ♪」

おお！見た目はまともだ！

テーブルには綺麗に盛り付けられたナポリタンが2つあった。

「いただきます！」

舞花は目を輝かせながらおれが食べるのをみている。

そしておれが一口目を口に運んだ。

！！！！！？！？なんだこれ！？酸っぱいし辛いしなんか変な甘さと苦さもある！？

「どう！？どう！？」

どうって…なにしたらこんな味になるの！？

「舞花一つ聞くけどどうやって味付けした？」

「えっとねえバルサミコ酢に砂糖に豆板醤にケツチャプそれに重曹をいれたよ！」

アホかああ！当たってんのケツチャプだけじゃねえかあ！ってかバルサミコ酢なんてなんであんだよ！？

でも舞花の目を見たら不味いなんて言えずにこういうってしまった。

「美味しいよ……」

「ホントに！？やったあ〜♪」

「昼は舞花が作ってくれから夜は俺作るから！」

こいつに料理させちゃいけないな。なにかと理由つけて俺が作ろう。

「ホントに！？慎くんの料理は一度食べてみたかったんだよねえ〜
♪」

「なんで？」

俺は味に集中しないよう話しに集中した。

「だって慎くんよく料理作るじゃん♪」

ああそっか。こいつは子供の時からいたんだもんな。そりゃ俺が料理してたのも見てるわな。

「楽しみにしてるね♪」

「ああ！うめえの作ってやつからよ！」

そこまでゆうと体に限界きた。

うおおお！！ヤバい！気が遠くなってく！

「どうしたの？慎くん？顔が緑になってるよ？」

緑！？普通青じゃね！？まさか変な成分でも入ってたか！？ヤバい
気絶する！

「大丈夫！？慎くん！？」

ヤバい気が遠くなってきた……………バターン！！

「慎くん！？どうしたの！？慎くん！？」

————PM7..00————

……………ん？俺どうしたんだっけ？

………そうだ！舞花の料理食って気絶したんだ！

「あっ！起きた！？」

「ああ。わりいな舞花。」

「いいって！いいって！」

ホントにわりいことしちまったな……

「体調悪かったんでしょ！？」

！？自分でも食ってその結論！？舌おかしいんじゃない？

「慎くんが体調悪いから夕飯作って置いたよ！」

テーブルにはきんぴらやおひたしや焼き魚などが並べられていた。

いやだあああ！！助けてくれえええ！

「しっかり食べて治さなきゃね！」

治るかああ！！

そしてこの日から俺は一週間もの間腹痛に襲われ舞花に料理をさせることはめったになくった。

お袋早く帰ってきてくれええ！！

第7話…あの世の掃除屋！

……なんだこの部屋は？汚すぎる！

親父達が転勤して1週間がたった。俺達は掃除をろくにせず暮らしてきたもんだから荒れ放題だった。

夏休みだからって怠け過ぎたな。

「舞花！掃除するぞ！」

「えゝめんどくさいよおゝ」

「こんな足場すらねえ空間でどうやって暮らすんだっつうの！」

そう俺達は食ったらそのまま、汚しても気にしない生活をおくっていたので足の踏み場もなかった。

「そのうちウジとかハエがたかってまいいか？」

「それはいやああ！」

「じゃあ掃除するぞ！」

「待って！害虫駆除は私の能力つかおうよ！」

能力？こいつ呪う以外もできるのか？

「能力なんかあるの？」

「えっとねえ、幽霊になったらいろんな特殊な能力が幾つか使えるようになるの。使える能力の数とかは個人差があるけどね♪私の場合は6つだよ♪」

すげえなあ。幽霊もバカにするもんじゃねえなあ。

「んでなんの能力使うの？」

「目には目を、歯には歯を、害虫には虫だよ♪」

まてっ！すっげえやな予感！

すると幽霊はお札を適当な場所におき、霊体になって呪文を唱え始めた。

「ヘルズ・ゲートの扉とそのさき魔の世界よ……」

おお！なんか本格的！っじゃなくてあいつ絶対まずいことやる気だ！

「さすれば現世の扉開かれん！我が名において命ずる！出でよブラックダイヤモンドオオオ！！」

「舞花ちよつと待つ……ぎゃあああ！！」

舞花が呪文を言い終わった次の瞬間、舞花の目の前に魔法陣のようなものが出現し、中心からあるものが大量に出てきた。

「ゴキブリイイイイ！？」

ぎゃあああ！！ いっぱい出てきたああ！ おれはゴキブリはダメなんだあ！

「よおしみんなあ！ この部屋にいる害虫は全部食べちゃいなさい！ あとこの部屋の床に落ちてる食べ物も全部食べちゃって！」

ヤバイ！ こいつゴキブリに動じないどころか命令してやがる！ こいつかなりすげえよ！

そして10分ほどたつとこの部屋に落ちてた食いカスなどあらかた消えゴキブリ達も消えていった。

バシッ！！

「舞花 ああ！ ゴキブリの召喚は絶対禁止！」

「いたあい！ なんでえ！？ 超役に立ったじゃん！」

「ダメなもんはダメ！」

「慎くんの意地悪！ 慎くんなんかピーーがバキュンバキュンになってドガアンしちゃえ！」

ひどっ！ また放送禁止用語かよ！？ 軽くへこむぞ！

「まあいいやあゝ 慎くん携帯貸して♪」

「はいよ。」

携帯を渡すと舞花は電話をし始めた。

「あゝもしもし？三途の川掃除屋ですか？掃除頼みたいんですけど」

コラァァ！人の携帯でどこに電話しとんじゃああ！

「あっ！そうですか！じゃあお願いしまあす♪」

そう言って電話をきった。

「どこに電話したんだ！？」

「霊界の掃除屋♪この人たち腕いいからいつも頼んでるの♪」

あの世に電話通じるの！？

少したつと源さんが帰ってた時に似た光が天井からでてきた。

そこから作業服にサングラスをかけた角の生えている鬼のような者たちが10人ほど出てきた。

「あっ♪きたあ♪」

こわっ！鬼じゃねえか！？

「じゃあお願いします！」

「「はい！舞花さん！！」」

こいつ名前覚えられてるよ！

「チリ一つ残ってたらいろいろばらすよ？」

「絶対残しません！」

この性格親父に似たのか…

――2時間後――

「終わりました！舞花さん！」

「ご苦労様♪いくら？」

「い、いや舞花さんから料金はもらえません！」

「大丈夫♪払うの慎くんだから♪」

ちょっとまたんかい！なんで俺が！？

「あっ！そうですか！じゃあ！」

てめえらもふざけんじゃねえええ！

「ええつと……11万8千円になります。」

高っ！ふざけんじゃねえええ！

「慎さん？どうしました？」

「おい……」

「はい？」

「料金と一緒に俺の拳喰らうか料金とらねえで無傷で帰るか選ばせてやる！」

「すみません！帰らせてもらいます！」

「慎くん！顔怖いよお！」

「えっとじゃあ…帰らせてもらいます…またのご利用お願いします………」

これだけやってまた来てくれるの！？プロってすごい！

「うん！またよろしくねえ」

「あゝ片付いたねえ♪」

「じゃあごはん作ってくるね！」

やめてくれええ！

第8話：海での1日！

「まいか！おれ明日シゲたちと海行くから留守番頼むわ！」

「海！？私もいきたあい！」

「こんど連れてってやるから明日は我慢しろ」

「まさかシゲくん達といくとか言っておいて他の女と2人で行く気なんじゃ！？」

被害妄想！？

「ばあか！んなわけねえだろ！とにかく明日は留守番してろ！」

「はあい…」

ん？やけに聞き分けがいいな。

—————次の日—————

「んじゃ行ってくる。」

「行ってらっしゃあい♪晩御飯には帰ってきてね！」

「あいよ。」

そして俺は駅に向かった。

「おゝい！」

前から金髪のツンツン頭のやつが来た。シゲだ。

「慎！待ったかぁ！？」

「んっいまきたところ。」

「ゆり達は？」

「いやまだ来てねえ。」

「そっか！とりあえず待つか！」

とりあえず俺とシゲは適当に話して待っていた。

すると栗色のセミロングの女が前から来た。

「！？まさか！？」

まいかぁぁぁ！？

「えっ！？」

「どうしたぁ？慎？」

「いやなんでもない！」

なんで来てんの！？しかも霊体で！

「ちょっとトイレ行ってくる！」

俺はトイレに向かった。舞花を連れて。

「舞花！おまえなにしにきやがった！しかも霊体で！」

「んゝ暇だったから浮気調査でもしようかなって思ってた。」

アホかあああ！

「迷惑かけないから♪ねっ？いいでしょ？」

「あゝわかったよ。そのかわり面倒なことするなよ？」

「うん♪じゃあ戻る♪」

戻るとすでにゆりと裕香がきていた。

「慎遅いゝ」

「遅刻すんなっていったのは慎の字なのに自分がしてるじゃないか！」

ゆり、裕香の順で言った。

ゆりは金に近い茶髪のパーマがかかったセミロング。

裕香は黒のストレートで団子にしている。ちなみに裕香はやくざの組長の一人娘です。

「慎くん？」

ゾワッ！後ろから冷たい空気を感じた。

「あとで話があるからね。」

ヤバい怒ってる！マジヤバい！

「慎の字どうした？顔色悪いぞ？」

「いやっ！あれっ！寝不足だからさ！」

「ガキかおめえは？」

シゲにだきやあいわたかねえわ！

そして俺達は電車に乗り海に向かった。

「うゝみゝはひろいなあゝ大きいなあゝ♪」

シゲが海を見るなり歌い始めた。

やっぱりこいつのほうがガキだ！

「会ってみたいなあゝジョーズにゝゝ♪」

いや会ったら喰われるから！こいつなに不吉なこと言ってんの！？

「あはは！シゲちいマヂウケる！」

「サメがでたら私の愛銃が火を吹くな。楽しみだ。」

おまわりさん！この人逮捕してください！

「なんか個性的な人達だね♪」

機嫌直ったか。あーよかった。

（ああ。相手にするの相当疲れるけどな。）

「でも慎くん楽しそう♪」

（まあな。一緒に居て飽きないしな。）

舞花の能力で声を出さずに考えれば会話出来て便利だった。テレパシーってやつらしい。

そんなこんなで俺達は海に着いた。

「海だあ！泳ぐぞお！」

シゲが真っ先に走っていった。

「うちも遊ぶう！」

ゆりも続く。

「慎くん私もお！」

舞花も行ってしまった。

「じゃあ私と慎の字は荷物番をするか。」

「裕香は遊ばないのか？」

「ああ。慎の字も一人じゃつまないだろ？」

「まあな。」

それからおれは裕香と話していた。

しばらくしておれはトイレに行きたくなりトイレに向かった。

トイレから出ると舞花いた。

「見て見て慎くん！今日のオカズ！」

おゝゝ見事なウニとサザエじゃねえか♪って密漁だろうがああ！

「んなもんどっからとってきたんじゃああ！」

俺は思わず叫んでしまった。

「あっちのほう潜ったらいたあ♪霊体だからいくらでも潜れるし♪」

「犯罪になるから戻してきなさい！」

「えゝこれで今日の晩御飯作ろうと思ったのにゝ」

「ダメだ！早く戻してこい！」

「うわぁぁん！慎くんのばかぁ！慎くんのピーー！」

またそれですか！？そろそろ読者も放送禁止用語は飽きたぞ！？

それから舞花は泣きながらウニとサザエを海に戻しにいった。

そして俺は一人で叫んだりしていたので周りから変な目で見られていた。

「遅かったな。」

「ああ。混んでたからな。」

「慎く裕香くビーチバレーやろうぜ！」

「やるかぁ！」

「裕香もやろぉ」

「ああ！」

「私もやるう！」

おまえは無理だろ！

2..2で別れやることになった。

途中舞花がボールをあらぬ方向へ曲げたり俺やシゲの顔面に当てたりとやりたい放題だった。サイコキネシスとかゆう物を動かす能力

を使ったらしい。

そのまま夕方になり帰ることになった。

シゲもゆりも裕香も寝ていた。

まったくほんとガキだなこいつら。

そして横でも舞花が寝ていた。

「慎くんがサメに食べられちゃう！慎くん逃げてえ！」

ひどい夢みてんなあ。

「ああゝ食べられちゃったあゝ」

ひどくね！？ってか軽！おれ食べられたのに！！

夏休みも残り2週間か。

何事もなきやいいけど。たぶんこいつがいるから無理だな。

第9話：親父からの手紙！

「慎、舞花ちゃん、元気かい！？おじさんと母さんはすこぶる元気だよ！こっちにきて1週間ほどたつがすぐ元気だ！2人だけの生活ですごく不自由かもしれないがまあ頑張れ！暮れには帰るからばっちり準備しといてくれよ！」

P・S・子作りは順調かい？！

偉人と書いて父より！＜

アホかああ！手紙よこしたと思ったらバカ丸出しじゃねえか！

「あははは！おじさんチョーウケる！」

「慎くん返事書こ！？」

ひとしきり笑うと舞花がいった。

「めんどくせえからやだ。」

「じゃあ私が書くからいいもん！」

「ああそうしろ。まともな手紙書けるならな。」

「慎くんがびっくりするような手紙書くもん！」

そうゆうと舞花は返事を書き始めた。

「できたあ！」

はやー！！

「見て!?! 見て!?!」

「どれどれ?」

「>おじさん、おばさん手紙ありがとうございます♪ 私たちもすごく元気です♪ 2人だけの生活もなかなか楽しいです♪ 慎くんは毎日私の料理を食べて幸せそうです♪ 早く帰ってきてくださいね♪」

P・S・ 子作りは順調です♪ 暮れには妊娠の報告できると思います♪ 美人と書いて舞花より♪<

嘘ばっかじゃねえかああ! 舞花の料理食って毎日死にかけとるわあ! しかも子作り一回もしてねえしするつもりねえ!

「どう!?! どう!?!」

「書き直し!」

「えゝなんでえ?」

「嘘を書くなあ!」

「けちい!」

舞花は舌をだしながら言っていた。

「じゃあこれは!?!」

>おじさん、おばさん手紙ありがとうございます♪ 私たちもすごく元気です♪ 2人だけの生活もなかなか楽しいです♪ でも慎くん奥手

だから子作りができません←←どうしたらいいですか!?

P・S・睡眠薬って薬局に売ってますか? 美人と書いて舞花より♪<

睡眠薬なことなんか手紙できくなあ! 何に使う気だあ!?

「どう!?

書き直し!」

それからおれは舞花に10回以上書き直しさせた。睡眠薬のことを聞くから。

>おじさん、おばさん手紙ありがとうございます♪ 私たちもすごく元気です♪ 2人だけの生活もなかなか楽しいです♪ 慎くんがいつもつつこんでくれるからすごく楽しいです♪ やっぱ私は慎くんのことが大好きです♪

P・S・ 慎くんが子作りしようとしてくれないんですがどうしたらいいですか!?

美人と書いて舞花より♪<

なんか照れるな。でもやっぱ子作りのことをきくんかい!

「これでいい!?

「あゝもうめんどくせえからこれでいいよ。」

「やったあ♪じゃあ早速出してくるね♪」

「いってらっしゃい。」

そして数日後親父から返事が来た。

＞舞花ちゃん、返事ありがとうねえ！おじさんと母さんはやっぱりすこぶる元気だよ！慎のことをこれかもよろしくね！

P・S・近所の薬局のおじさんに10年前のことばらされたくなければ睡眠薬を売って言えば10000円で売ってくれるからそれを慎に飲ませて縛っちゃいなさい！
やっぱり超人と書いて父より！＜

あんたも睡眠薬かああ！

「やったあ♪あとで買いにいこ♪」

いくなああ！！

第10話：最悪の1日！

夏休みが終わり今日から新学期になった。

親父が余計なことしてくれたおかげで舞花と同じ学校しかも同じクラスになった。

「慎くん！早く出ないと遅刻しちゃうよ！」

「あと少しまで。準備が終わっとらん。」

俺はシルバーのピアスとネックレスをつけた。

「おし！行くか！」

「うん！」

俺達は学校へいった。そうして人生最悪の日が始まった。

「はじめまして♪今日からこのクラスになる田辺舞花です♪」

「やべー。可愛くね？」

「おれ狙っちゃおっかな！」

「やりてえ！」

そんな声がまわりから聞こえる。

余計なことゆうなよ舞花。

「ちなみに私このクラスの生田慎の婚約者なんでその辺もよろしくね♪」

ぎゃー！！余計なこといいやがったあ！！

舞花が余計なことを言った瞬間クラス中から冷たい視線が飛んできた。担任まで白い目で見ている。

さっ最悪だ。あいつ今日晩飯抜きだな。

自己紹介も終わり舞花は席に着いた。俺の隣の席に。

「慎くん今の自己紹介なかなかよかったでしょ！？」

「もっかい死ぬか？」

「慎くん怒っちゃだあ！」

そしてホームルームも終わり始業式のため体育館へ移動になった。

「しゅんゝなんで婚約者がいるって言わないんだよお！」

シゲが俺に言ってきた。

「ああ。わりいな。最近いろいろあったからな。」

「そっかあ！あとで紹介しろよなあ！」

「ああ。あとでな。」

そんな会話をしながら俺達は体育館へ言った。

そういえばさつきから舞花の姿が見ねえな。

そんなことを考えてる間に校長が話しを始めた。

（そういえば校長ヅラなんだっけなあ。そんな風には見えねえのに。）

すると校長のすぐ上にふわふわ浮いてる舞花を見つけた。

あんなところでなにやっとなんじゃああ！

舞花はニヤニヤしながら校長の頭を見ていた。

まさか！？ヤバい！！校長逃げろ！

そうおもった瞬間舞花が手を前に振った。

ピューン！

校長のカツラが空を飛びあり得ない曲がりかたをしながらバスケットゴールに見事に入った。

やりやがったああ！！

普通に話していた校長もカツラがバスケットゴールに入るのを見た瞬間顔を青くしながら自分の頭をさわった。

「私のカツラがないいい!!」

校長が叫んだ瞬間体育館中の生徒が爆笑していたが俺は苦笑いしか出来なかった。

最悪だああ! あいつカツラ飛ばしやがった!

さらに舞花がこんど面白いものを発見したような顔で生徒指導の佐間をみている。

まさかあいつも!?

そしてまた舞花が手を前に振った。

ピューン!

作間の髪が上に飛んで行き校長の頭に落ちた。

あいつもカツラかよ!!

またも体育館中から爆笑が響き渡り收拾がつかなくなった。

「ぎゃっははは! 作間もヅラかよお! マジウケる!」

「あいつも顔が青くなってやがる! うあっはっはっはっ!」

そんな声が響き渡っており急遽始業式は中止になった。

しかし舞花のいたずらはこれで終わらなかった。

「この騒ぎを起こしたのは1年2組生田慎です！」

舞花の声がマイクごしに体育館に響いた。

「！！？あいつなに言っちゃってんの！？どう考えても舞花じゃねえか！？」

「いくたあ！！お前ちよつとこおい！！」

「！！？先生！？おれはなにもしてませんよ！？」

鬼のような顔をした作間が俺を呼んだ。

結局俺はこのあと無実の罪で2時間校長室で尋問されたが証拠がないので解放された。

そして俺はそのまま家に帰った。

「あっ！慎くんお帰り♪」

「まいかああ！てめえ何してやがる！？」

「だって慎くんが教室で怒るんだもん！」

それだけであの騒ぎ起こしたんかああい！

「それに面白そうだったし♪」

結局それが理由じゃねえかあ！

「いい思い出になったでしょ!？」

もっかい殺すぞ!クソ幽霊が!

「今日お前晩飯抜きな!」

「やだぁ!」

こうして俺の最悪の1日が終わり最悪の学校生活が始まった。

第11話：駅でのケンカ！

あの騒ぎから1週間たった。それまで舞花はいろいろやってくれた。この一週間で呼び出しを20回はくらった。舞花が罪を俺に着せたため。

今回の話しには関係がないのでまた別の機会に話そう。

今日は舞花が新しい服が欲しいと言う理由で買い物にいくから俺は準備をしていた。

まあ俺も服買いたいし行ってやることになった。

「慎くん！おまたせ♪」

「準備できたか？」

「ばっちし♪」

「んじゃ行くか。」

「うん♪」

「とりあえず舞花のやつからしますか。」

「いいのお？じゃあピンクーフライ行こ♪」

絶対にやだっ！

「あそこは抜きでな。」

ピンクーフライは店中ピンク色の目が痛くなるような店だ。

それにしても学校がない日は平和だ。

「しゅん！舞花ちゃん！」

んっ？この声は？

「あっ！シゲくんだ！」

「2人でなあにやってんの？」

「今から慎くんとお買い物に行くの♪」

ちなみに舞花とシゲは前回俺が校長室にいる間に仲良くなったみたいです。

「そうなんだあ！いいなあ慎はあ！こんな可愛い許嫁がいて。」

性格めっちゃくちゃけどな。

「んなこと言われたら照れるやん！」

関西弁！？

「あはは！舞花ちゃん面白いねえ！」

いやつつこめよ！

「おおきに！」

「じゃあまたねえ♪」

「ほなさいならあ♪」

「……なんで途中関西弁だったの？」

「照れちゃったから♪」

照れると関西弁になるの！？

そんな会話をしながら駅まで歩いていった。

途中舞花はパフェとサンデーの違い語り始めたが軽く流しておいた。

駅に着くとバカそうなヤンキー5人が絡んで来た。

「ねえねえ君達俺達に金貸してくんない？」

俺は軽く流して行こうとしたが舞花がやる気満々だった。

「貸すわけないでしょ！脳ミソプチトマト人間が！」

ひどっ！！

「はあ？なにおまえ？俺達とやる気？」

「くだらないこと言っていないで早くどっか行ってよ！まあやるつも

りならこつちもやるけどね！」

やめてええ！これ以上面倒事増やさないで！

「おい！舞花！やめとけって！」

「おらっ！チビは引っ込んでろ！」

「…………チビ？今誰にチビって言った？」

俺の身長は168とそんな小さくはないが相手全員180近くはある。

確かに相手からみれば俺はちっちゃいだろいが。

「おめえに言ったんだよ！ドチビが！今は俺達とこの女の問題なんだよ！」

ぶちっ！！

「慎くん？」

「てめえらでけえからっていい気になをじゃねえぞ！！オラァァ！！」

はい！どうも作者です！慎がキレたので代わりに解説させてもらいます！

バキッドカツベキッ！

慎の得意コンボの右フック↓左ヒザ蹴り↓肘鉄が相手に見事に入っ
た。

「てめえ！なめんなよ！」

「てめえか最初に俺をチビと言ったのは！」

まあ慎はそんなちっちゃくないけど幼いころから父親にチビってか
らかわれてたからそりゃ過剰に反応するよね。

「慎くんすごおい！」

「てめえも言ったよな！？」

「へっ！？俺は言ってな……ぎゃああ！！！」

言い終わらぬうちに慎が殴りかかっていた。

ちなみに慎を元の状態に戻すにはチビと言った奴等を全員潰さなけ
ればならない。

「よう！チビなかなかやるじゃねえか！」

「てめえ！またチビつつたな！？」

「ああ。言っただぜ。」

相手のリーダー格が挑発をしている。

「後悔させてやるぜ！」

「いけえ！ 慎くん！」

いや舞花ちゃん止めようよ！！

ここで慎の必殺技が炸裂した。

「我流体術第三の技！ オーバーインパクトオオ！！」

「ぐああっ！」

慎は相手の懷に潜り込みスピードにのった拳で顎を殴り相手を失神させた。

じゃあ全員潰したんで慎も元に戻るんで！ あっちなみに俺彼女募集中でえす！

「慎くん大丈夫？」

「これ俺がやったのか？」

「うん♪なんかあいづらがチビとか言ったら目付きが変わってすごい勢いで倒したよ！」

「……チビ？」

「あいづらがいったのお！」

「そうか。」

やべえやつちまったなあ！チビとか言われると理性ぶっ飛ぶからなあ。

原因の親父が帰ってきたらなぐつたる！

ブウウン！

やべっ！マッポが来やがった！

「逃げんぞ！舞花！」

「えっ！？」

なんか今回ほとんどケンカだけになったなあ。作者もネタギレか？

俺は舞花を抱えて走って逃げた。

「慎くん服買いに行かないの？」

行ける状態かああ！？

「じゃあ薬局だけ行こ？」

「なんで？」

「睡眠薬買うから♪」

行くわけねえだろおお！！

「ダメだ！」

「けちい！」

結局学校なくても最悪じゃねえかあ！！

第12話..命懸けのダイエット! (前編)

ある洗濯日和の朝舞花が青い顔していた。

「どうした?」

「慎くん……」

「なんだよ? 風邪でも引いたか?」

「話があるの?」

「なんだ?」

「もしも朝私の部屋に行って寝てるのがミルタンクだったらどうする?」

ポケモン!?

「とりあえず逃げるな。」

「だよね……。」

なんだ? 深刻な話しじゃないのか?

「んでなにが言いたい?」

「私ね……太った……」

だから！？ってか前振りなげえよ！

「それで？」

「それでじゃないよ！私がミルタンクになって海パン野郎にゲットされてもいいの？」

なんで海パン野郎！？ってかあいつ海に住んでんのしか使わなくね！？

「あゝとりあえずダイエットしろよ。」

「慎くんも一緒にしよ？」

ふざけんなああ！おれはお前と2人暮らししてから3キロも痩せてんだよ！

「やだ！」

「してよお！じゃなきゃ呪ってやる！」

「あゝそうしろ。」

どうせ呪いなんかかけねえだろ。

「だったらかけてやる！」

そう言うとき舞花はお札を起きなにやら呪文を唱え始めた。

「ヘルズゲートより先……………」

ん？この呪文どっかで聞いたような……

「出でよブラックダイヤモンドアーンド魔界害虫ナズラ！」

……ブラックダイヤモンド？

「ぎゃああ！蜘蛛にゴキブリイイ！」

そこには体長1メートルはある蜘蛛が3匹と無数の手のひらサイズのゴキブリがいた。

「一緒にしてくれる？」

「わかった！やるっ！やるから！だからこいつらを消してええ！」

「んふふ♪いいよ♪」

舞花が指を鳴らすと虫達は出てきた穴に帰って言った。

なんであいつは虫を従えてんじゃああ！

「じゃあ今から走りにいこ♪」

「はいはい。」

それからおれは一週間毎日5キロ走り食事制限もした。

「少しは痩せたか？」

「えっとねえ……0.5キロ痩せた♪」

「何キロ落とすつもりなの？」

「3キロ♪」

まだまだか……

「なんか手っ取り早く痩せる方法ないかなあ？」

「んなもんあったらとっくにやっとするわ。」

「だよねえ」

「そういえば命ギリギリのやり取りをすればやせるって聞いたよう
な……」

なに情報！？

「おれはやらんぞ！」

「よし今から魔界に行こう！」

人の話をきけええ！

「絶対やだ！」

「じゃあ入り口作るからちよつとまってね♪」

いやだああ！ たすけてくれええ！

舞花が手を前にかざし何かを呟くと目の前に黒い穴が空いた。

「さっ行こう♪」

「いやだああ！」

舞花に引っ張られそのまま黒い穴に連れてかれた。

黒い穴を抜けるとそこには紫の空に黒い雲、そして目の前には真っ暗な森が広がっていた。

「なんかイメージ通りの場所だな。」

俺はもう冷静だった。

「魔界は人間の汚い感情が溜まる場所だから空気は悪いし人間の感情の影響受けて狂暴になった魔獣しかいないからねえ。」

「んで目の前にある森が魔界で一番危険なラ・サハルトウの森だよ！」

だよ！じゃねええ！んな危険な所に連れてくんなああ！

「気をつけてねえ。ここはランクSSの魔獣の住みかだから油断すると食べられるからね。」

「ランク？」

「ランクって言うのは早い話し危険度だよ！下からD・C・B・A・

S・S・S・GでSから上は特に危険で人を食うよなのしかないから狩るにはハンターライセンスっていう免許がいるの!」

ちよつとまてええ! ようは死にに來たようなもんじゃねえかあ!

「舞花免許は?」

「あるよ♪」

こいつもしかしておれより強い?

「慎くん確か日本刀使えたよね?」

「ああ一応剣道やってたからな。」

「じゃあちよつとまてね。」

舞花は手を前にかざし目を閉じた。

すると何もない空間から日本刀が一振り出てきた。

「うお! 舞花そんなこともできたのか!?」

「うん♪能力の一つで想像したものを出せるの♪もちろん無生物限定だけどね♪」

こいつ本当にすげえな。

「ってかこれは霊体じゃなくてもできるのか?」

「うん♪集中するだけだからね♪」

「そうか。っで舞花は武器なにするんだ？」

「私はこれ♪」

舞花の手には鞭が持たれていた？

女王様！？それともインディージョンズ！？

こうして俺達の命懸けのダイエットが始まった。

第13話..命懸けのダイエット! (後編)

ここに来て10分ほどたった。

がさっ!!

!!? なんかいる!?

「きたよおゝ慎くん!」

「おっおう!」

「ウガアア!」

ぎゃああ! でたあ!

目の前には黒く固そうな毛を生やした狼男のような魔獣がいた。

「ウルフマンかあゝ。」

残念そうにゆうな!

「悪いけど君には用ないから消えてくれる?」

挑発するなあ!

ウルフマンは唸り声をあげながら鋭い爪をみせ襲ってきた。

「邪魔!」

「グリアアア！」

舞花が鞭で攻撃した瞬間ウルフマンの体が燃えあつとゆうまに灰になっってしまった。

一撃かよ！

「なんでいま燃えたの！？」

「これはサラマンダーの皮で作った鞭だから摩擦で簡単に燃えるの♪」

こわっ！

「ちなみに慎くんの刀は氷冷石で出来てるから相手の傷口を凍らせたり降って空気中の水分を凍らせて打撃にも出来るからね♪」

なんでそんなもん具現化できんだよ！

がさっ！

またきたあ！

「おーまたきたねえ♪」

喜ぶなあ！！

「舞花か？」

「あゝ！マルスさん！」

知り合い！？

そこには金の毛並みに頭に一本の角を生やした馬のような魔獣がいた。

「喋ってる！？」

「紹介するね！この森の主でナイトメア族のマルスさん！」

主！？主と知り合いなのにこの森の魔獣殺し回ったの！？

「マルスさん！この森にすつごく強くて命のやり取りを出来るような魔獣いない？」

「なにをいってるんだ？」

あつ！もしかしてまともなキャラ？

「今ねえダイエット中だからさあゝ」

ダイエットに命かけるなあ！！

「舞花！魔獣が喋ってるぞ！？」

「Gランクの魔物は喋ることが出来てしかも頭がいいの！その辺魔獣みたいに本能で戦わないからすつごく強いんだよ！」

「なんだこの人間は？」

「私の許嫁の慎くんだよ!」

「そうか。ダイエット中ならちょうどよい私の頼みを聞いてくれるなら私の術で望んだ分だけ体重を減らしてやろう。」

「ほんとにいい!? やったあ♪でっ頼みって!」

「我が一族のルクを覚えているか?」

「あゝあのやな奴ね。」

「ルクが一族のものを5体殺し逃走をした。この先の洞穴で体を休めているとゆうことを聞いたので殺してほしい。もう私の手には負えないのだ。」

「わかった♪じゃあマルスさんはここで待ってて!」

「すまぬ。では任した。」

「うん♪」

あのゝさつきから俺放置されてんですけど…なんかもうコメディーじゃないよな?

「行くよお! 慎くん!」

「お主も一つ願い事叶えてやる。だから頼んだぞ。」

「はい! 分かりました!」

こうして俺達は洞窟へむかっていった。

「舞花はルクってやつを知ってんのか？」

「うん！一度だけ会ったことあるよ！」

「どんなやつなんだ？」

「とにかくやな奴だよ！人にいたずらすんの大好きだしさ！」

いやお前も一緒じゃん！

「いま慎くん失礼なこと考えたでしょ！？」

「いっいや考えてねえよ！」

なんでわかったの！！？

「っでルクは強いのか？」

「マルスさんが手には負えないって言ってたから相当強いね！マルスさんは魔獣でも最強に近い部類の強さを持つてるからね！」

最悪だああ！帰らせてくれええ！！

「まっ！なんとかなるでしょ♪」

なるかああ！！死ねえ！

「あっ♪あれだよきつと!」

舞花が指を指した先には真っ暗な洞窟があった。

そして俺達はそこに入って行った。

「意外に明るいな。」

「多分発光石でできてんだろうねえ。」

そんなことを話しながら奥に進むと声が聞こえてきた。

「おやおやあそこにいるのは小便くさい舞花ちゃんじゃありませんかあゝ」

「!?!? ルク!?!」

「名前を覚えてくれてたのかあい? 嬉しいねえゝ」

「いやでも覚えるわよ! それよりあんたには死んでもらうわよ!」

「はっはっはっ面白いこというねえゝ」

「能書きたれてないで来なさいよ!」

「んじゃ俺も手伝うかね。」

「はっはっはっ! 元気いねえゝ! そっちの男の子もかあい?」

「ああそうだけど?」

「じゃっやるかねえ！くらえ！ダークサイス！！」

するとルクの角から黒い刃が飛んできた。

「おわっ！！」

「やるわねえ！こっちも行くわよ！フィリップモリス！」

タバコの名前じゃねえかああ！

舞花の鞭から炎が3本でてルクにむかっていった。

「甘い！」

ルクはそれを片手で弾き飛ばした。

そして俺はその間にルクに斬りかかった。

「はっはっは！そんなんじゃおれは倒せないよお」

俺の攻撃あっさりかわされルクの後ろ蹴りをまともに喰らってしまった。

「がっ！」

こいつマジで強い！ヤバイ！死ぬかも！

「グラビディコア！」

なんだこれ！？体が重い！？

「ちつくしよおゝ重力の術使うなんてずるいゝ」

「2倍で音をあげちゃうのお？」

「てめえ！なめやがって！」

「おゝおチビちゃんは体が小さいから平気かあゝ」

「あつ。言っちゃったあ……」

「…………チビ？それは俺のことか？」

「他に誰がいるのかなあ？おチビちゃん？」

ぶちっ！

はい久しぶりの作者です！また慎が切れたんでおれが解説に回ります！

「てめえ！骨も残らねえと思いやがれ！」

「おおゝ威勢がいいねえ…………ぐばああ！」

慎の攻撃が見事に入った！

あっ！前回もちょっと言ってたけど慎は小学生の時から剣道を3年間やってたんだよねゝほかにも総合格闘技にムエタイといろんなのやってたから強いんだよ♪

「クソチビがああ！生きて帰れるとおもうなよおお！」

「こっちのセリフだ！ゴルァァ！」

「うちも援護する！くらえ！作者の解説つまんないよファイアー！」

舞花ちゃん！そりゃないよ！

「がっ！ぐあっ！」

「オラァァ」

慎が出した氷の珠がルクの目に当たったあ！ナイス慎！

「これで終わりだ！笠木流上段奥義時雨切り！」

慎の刀がルクの頭に刺さりそのまま一気に振り下ろした。

「ぎやあああ！！！」

じゃあ慎がもとに戻るんで慎に変わりまあす！最後に！感想やリク
エストまってまあす！これからも応援よろしくねえ！

………うわっ！なんだこれ！？ルク頭から血を流して死んでる！

「やったね！慎くん♪」

「またやっちゃった。」

「やっぱり慎くんは強いね♪」

作者め！そんなにいたい目立ちたがり屋があ！

「さっ！マルスさんのとこに戻ろ！」

「ああ。」

その場をあとにして俺達は戻った。

「マルスさんルクを倒してきたよお♪」

「すまん。では望みを叶えよう。」

「じゃあ体重を5キロ減らして♪」

3キロじゃないの！？

「お安いごようだ。」

すると舞花の体が光に包まれた。

「これで減ったぞ。」

「ありがとう♪」

「でっ 慎殿は？」

「俺は……舞花がむちゃくちゃなことしないようにしてくれ！」

「無理だ！」

即答!?

「じゃあ帰ろうか♪」

いやおれまだ叶えてもらってないし!

「じゃあ舞花の料理を上手くしてくれ!」

「チッ! いいだろお。」

チッ!?! 舌打ちしなかった今!?

「じゃあ帰ろうか♪」

「ああ。」

俺達は来たときと同じ黒い穴を通って帰ってきた。あっちに行ってから5時間もたっていた。

「やったあ♪5キロ減ってるう♪」

「よかったな!それより舞花!料理作ってくれ!」

「わかったあ♪」

———30分後———

「出来たよお♪」

テーブルにはご飯ときんぴらと味噌汁が並んでいた。

上手くなっただよな！？

「いただきます！」

俺は恐る恐る口に運んだ。

ぎゃあああ！！前よりひどくなってやがる！！マルスさんの嘘つきがああ！

その晩俺は吐き気と腹痛に襲われ次の日学校を休んだ。

第14話：霊界の仕組み！

前回舞花の料理を食べて俺は腹痛と吐き気に襲われ学校を休むことにした。

「じゃあ行ってくるけど慎くんほんとに大丈夫？」

「大丈夫だ。ねてりゃ治る。」

「でも原因はなんなんだろうね？」

お前の料理以外になにがあるんじゃないやあああ！

「さあな。」

「うーんまあいいや！じゃあ行ってくるね。」

「ああ。いつてらっしゃい。」

「とりあえず寝るか。」

俺は舞花が行くと自分の部屋に入り寝ていた。

「……ん、……くん、……：慎くん。」

ん？なんだあ？

目を開けると白髪頭の体格のいい老人がたっていた。

「源さん！？」

「久しぶりじゃのお！舞花ちゃんに会いに来たんじゃがどこに
いるんだい？」

「舞花なら今学校に行ってますけど。」

「学校？学校に通っているのかい？」

「はい。うちの親父のわけのわからん人脈使って戸籍も持ってます
よ。」

「なんと！？それはいいのお！」

「帰って来るのは4時すぎですけどどうします？」

「うゝむでは帰って来るまで慎くんで遊ぶとするかの。」

俺で遊ぶ！？

「ほっほっほっ！嘘じゃよ！」

まだキャラ掴めてないんだから冗談言うのはやめてください。本当
に怖いんで。

「あのお…一つ聞きたいんですけど霊界ってどんな仕組みになっ
ているんですか？」

「どんなと言われてもまあ一言で言うなれば適当じゃの。」

適当なの！？

「源さんは霊界を行ったり来たりしてますがなんでそんなこと出来るんですか？」

「一般的に幽霊は皆あの世とこの世を行き来出来るんじゃないよ。」

「そうなんですか!？」

「霊界のトップの光神が適当じゃからの。」

「光神？」

「光神はこっちでゆう天国の神のことじゃよ。」

「その下に天国の風神、雷神、三途の川の死神族のデス・クリア、迎え神族のダーク、地獄の悪魔のヒルマ、バンパイアのシリア、魔界のナイトメア族のマルス、サイクロプス族のタイタンがいるんじゃない。」

マルスさんそんな偉いの!？」

「ちなみにこの8人の中でまともに仕事するのはマルスとダークと風神とシリアだけじゃ。あとは適当じゃ。」

勤務態度ひどっ!!

「仕事ってなにがあるんですか？」

「天国は主に現世、天国、地獄、三途の川、魔界の統括、管理、地獄は天国で悪さをしたものを裁き牢獄などの管理、三途の川は死ん

だものを天国へ導きまだ死なないものをこっちに送り返したり寿命の管理、魔界は魔獣が天国などに行かないようにし危険なものを排除したりする。」

「結構しつかりしてるんですね。」

「じゃが光神が適当じゃから仕事がたまつとるらしいんじや。そのたび風神が捕まえて仕事させておる。」

風神さんかわいそうに。なんか俺、風神さんと気が合うような気がする

「ああちなみにこんど天国で4地区合同運動会があるから暇ならでないかい？」

運動会！？

「運動会なんてあるんですか？」

「光神が面白そうという理由で10年前に開催したんじや。それを行ったときの風神の怒りようといったらすごかったぞお。」

なんで知ってんの！？

「もしかして源さんも結構偉いんですか？」

「いやあ。光神と仲がいいんじや。よく舞花ちゃんとわしと光神と雷神で風神やシリアにイタズラしておったからの。いろんな弱味も握っておったしのお。」

舞花の性格は親父じゃなくて源さん達のせいかな。

「ははっ…そうですか。」

「さてもう4時になるのお。」

「そうですね。そろそろですね。」

「たっだいまあゝあっ源さん♪」

「おおゝゝ舞花ちゃん。」

「久しぶりい♪そうそう♪昨日ね慎くんと魔界で魔獣狩りしてきたの♪」

「魔獣狩り？」

「うん♪」

「慎くん……」

「はい？」

「舞花ちゃんに傷一つ付けたら殺すぞ……」

ぎゃあああ！また目付きと口調がかわってるうう！

「あはは♪大丈夫だよ♪それより源さん！ご飯食べてってね♪」

「舞花が作るのか？」

「うん♪今日はオレンジ風味の豚の角煮だよ♪」

いやああ！もう名前からして危ねえよ！

「おおそれは楽しみじゃのお！」

いや源さん止めようよ！

その晩俺だけでなく源さんも倒れうちに泊まって行くことになった。

もう絶対舞花に料理はさせん！

第15話..舞花のイタズラ！（化学実験）

今日は化学の実験が行われた。なんの嫌がらせか俺と舞花は同じ班になってしまった。

「えーこのようにして反応の違いをくらべ……………」

ねみいなあ。

「では初めてくれ。」

そして班ごとに実験が始まり俺は適当に結果を書いていった。

「慎くん慎くん！」

「ん？」

「博士絶対カツラだよ！」

知るかああ！

ちなみに博士ってのは化学の先生でいつも白衣をきているのでみんな博士と呼んでいる。

「余計なことするなよ？」

「わかってるって♪でも確かめたいなあ」
「ヤバイ！こいつ絶対やる！」

「まいちゅん！早く片付けて終わらせお〜」

「うん♪」

よしそのままにもせずに終われ！

すると舞花が何かを思い付いたような顔した。

「結花ちゃん！うちちよつとトイレ行ってくるね！」

「わかったあ♪」

まさか！？

案の定舞花はすぐ帰ってきた霊体になって。

博士にげろ！

舞花は紙をねじ込んだペットボトルを持っておりそれに火を着けた。

ぼおん！

「ぎゃあああ！熱いいい！」

化学室中啞然としていた。

それもそうだ博士の頭上で爆発が起きたどころか火のついたカツラが空を飛んでいたのだから。

「僕のカツラが飛んでったあ！」

舞花は博士の上で笑っていた。

そしてカツラはおれの目の前に着地した。

「生田くん！またきみかあ！」

なんで！？

「やってねえよ！」

「じゃあ誰がやったんだね？」

「知るかよ！事故だろ！」

「頭のうえで爆発が起こる事故なんて聞いたことないわああ！」

キャラ変わったよ！

そんな口論をしていると舞花が戻ってきた。

「ぶあははは！先生の頭マジうける！」

やったやつが笑うなああ！

「先生！慎くん昨日から先生のカツラを暴いてやるって言ってますよお！」

舞花ああ！てめえ！なに言ってやがる！

「そうかそうか。生田君放課後職員室に来なさい。」

いやああ！俺の進級が遠ざかってくう！

———放課後———

「生田君、僕になんの恨みがあってこんなことをしたのかな？」

「だからやってねえつつうの！」

「君の婚約者が言ってたじゃないか。」

「あいつはイタズラが大好きだからふざけて言ったんだよ！」

「僕の髪が前より減って前にワカメがくつついたようになったじゃないか。」

知るかあ！ってか人の話をきけえ！

「とにかく自白するまでは帰さないからな。」

最悪だああ！

ふと博士の頭を見ると霊体の舞花が頭上にいた。

こんどはなにやるき！？

俺は腕を組みなにもできないとゆうようにした。

「自白する気になったかね？」

「やってねえつつうの！」

舞花は手を前に出し目を閉じた。するとバリカンがなにもないところから現れた。

ヴィーイン！

「ん？なんだこの音は？」

バリバリバリバリ！

舞花が笑いながら博士の最後の髪を剃っていた。

「ん？なんか落ちてきたな。………髪の毛？」

気付いた時にはきれいに頭が丸くなっていた。

「最後の髪があああ！！！」

舞花は死にそうなくらいに笑っていた。

「明日見合いなのにいい！」

かわいそうに。

そして舞花はひとしきり笑うと帰ってしまった。

俺はとゆうと騒いでる間にそっと職員室を出て帰って行った。

次の日俺は髪を剃ったとしてまた職員室に呼ばれた。

俺じゃないんだよおお！！

第16話..みんなでバスケ!

「安西先生!バスケがしたいです!」

日曜の朝っぱらから舞花がわけのわからんことを言い出した。

「なんだいきなり?」

「バスケがしたいのお」

「してくればいいじゃん。」

「慎くんもお」

「やだよ。ねみいし。」

「したい」

「だいたいなんでいきなりんなこというんだよ?」

「スラ○ダ○クに感動したんだもん!」

単純な理由ですこと。

「じゃあ後でシゲとか誘うから待ってろ。」

「わかったあ♪」

俺はのろのろ起きてシゲに電話した。

「もしもし？」

「おう！どおしたあ？」

朝から元気いいなあ。

「後で一緒にバスケやんね？」

「誰いんの？」

「俺と舞花。あとゆりと裕香も誘おうと思ってる。」

「舞花ちゃんくるの！？じゃあやる！」

じゃあってなんだ！？

「ああわかった。じゃあ後でな。」

「あっ！ちよつとまで！裕香達に舞花ちゃんのこと紹介したか！？」

「いや、まだだけど。」

「じゃあ防弾チョッキきてけ！」

あるかああ！

「なんで？」

「いけばわかる。」

「まあいいやわかった。じゃあな。」

そう言って俺は電話を切った。

後は裕香とゆりか。

「もしもし?」

「どうした? 慎の字。」

「後で俺達とバスケしねえ?」

「誰がいるんだ?」

「俺とシゲとあともう一人いる。あとゆりを誘おうと思ってる。」

「ゆりは今一緒にいるから誘っとく。それよりもう一人とは?」

「後で紹介する。」

「ああわかった。12時くらいでいいか?」

「そんぐらいでいいよ。じゃあとでな。」

俺は電話を切って舞花の所に向かった。

「12時からやるから準備とけよ。」

「わかったあ♪」

いまを見るとボールやTシャツなどすでに準備されていた。

やる気まんまんかい！

———PM12:00———

「慎くん！はやくう！遅刻しちゃうよ！」

だれのせいだとおもってんだ！

あのあと舞花はバスケをするにはどんな髪型いいかとかゆうわけのわからんことで悩んでいた。

「やっぱバスケするならまとめるのが一番だよねえ♪」

さんざん悩んでそれかい！

「あっ！やっときたな！」

「わりい！遅れた！」

家から10分程度の場所にある総合体育館に20分遅れて俺達はついた。

「慎おそい」

「まったくだ。」

「わりいな！」

「つで慎の字そっちの子は誰だ？」

「私慎くんの許嫁の舞花でえす♪」

「許嫁？」

「マジ！？」

「ほんとでえす♪よろしくね♪」

「とゆうことだ。」

「いつからそうゆう関係だ？」

「夏休みの初めくらいかな。」

「つとゆうことは海に言ったときすでにいたとゆうことか。」

「ああ。そうだけど。」

「裕香おちつけ！」

シゲがなぜか止めに入った。

バキュウン！

ぎゃあああ！！撃ちやがったああ！なんで！？

※裕香はやくざの組長の一人娘で世の中物騒だからとゆう理由で拳銃は常備してます。

「貴様ああ！私に隠し事するとはいい度胸じゃないかあ！」

「いや隠してたわけじゃ……」

「問答無用！」

バキュウン！

ぎゃあああ！誰か通報してえ！

「まあまあ！おちつけ！」

「裕香ちゃんかっこいい〜」

お前も止めろ！

「裕香あそうゆうことはバスケ終わってからにしよう。」

止めるところがくね！？

「わかった。とりあえず始めるか。」

結局ゆりの一言でその場は収まりバスケが始まった。

「じゃあチームは女の子対男の子ねえ♪」

「おっけえい！頑張るぞ慎！」

「わかってるよ。」

そして試合が開始した。

「行くよお！」

「慎！ゆりマークして！」

「まかせろ！」

舞花は裕香にパスをしどんどん上がっていった。

「裕香ちゃんこっちい！」

「任せた！舞花！」

「うん♪庶民シュート！」

「なめるな！ハエたたき！」

「やるなあ！シゲくん！」

「いけえ！慎！」

ボールは俺のはるか上を通りゴール近くに落ちた。

追い付けるかあ！！

そしてゆりはそれを取り一人で上がっていった。

「慎なんか簡単に抜かせるもおん！」

「なめんな！」

俺は右からゆりに突撃した。

ゆりは逆サイドに避け裕香にパスをした。

「ゆりちゃんかっこいい♪慎くんかっこわるい♪」

もっかい死なすぞ！

「シゲ！裕香を止めろ！」

「合点でい！」

江戸っ子！？

「なめるなよ！」

裕香はなんなくシゲをかわしシュートを決めた。

「やるう♪裕香ちゃん♪」

こんな調子で試合が進み結局57対72と俺達は完敗した。

「あゝ楽しかった♪またやろうね♪」

「そうだな。」

「慎の字。今日は疲れたからまた今度詳しいことを聞く。」

「ちゃんとうちにも話してね♪」

「慎！俺もお！」

お前はしってんだろ！これ以上なにを聞く気だ！？

「ああ。わかった。」

「んじゃねえ」

「じゃあな。」

「またな。」

「ああ。またなんかあったら連絡する。」

「ばいばあい！みんなあ！」

「じゃあ帰るか！」

「うん♪」

「慎くん！疲れた！おんぶして！」

するかああ！

「やだよ。」

「してええ！」

「わかったわかった。してやるから騒ぐな。」

「やったあ♪」

俺は舞花をおんぶし歩きだした。

「慎くん。」

「ん〜?」

「またみんなで遊ぼうね♪」

「そうだな。」

「Z Z Z : Z Z Z :。」

寝るのはや! ってか人の背中で寝るなああ!!

「んふふ♪慎くん♪」

「なんだ?」

「やっと妊娠したよお♪」

寝言かよ! ってか作る気ねえし!

第17話：光神& a m p ; 風神登場！

「慎くん！あそびいこ！？」

「どこに！？」

「魔界♪」

行くかああ！

「絶対やだ！」

「けちい！」

「うるさい。」

「ぶくく。……ん？誰かきた！」

「はあ？インターホンなってねえぞ？」

ドオン！！

俺の部屋からなにかが落ちる音が聞こえてきた。

なになに！？

「慎くんの部屋か♪」

嬉しそうにするなああ！

部屋にいくと金髪で髪の長い男が立っていた。

「あっ♪ニীগさん♪」

誰！？

「おっ！舞花久しぶりだな！」

「久しぶり！また風神さんから逃げてきたの？」

「いやこっちに用があつてな。」

「何の用があるの？」

「舞花の許嫁をみようと思ってな！」

「ええっと…誰ですか？」

「おっ！お前が噂の生田慎か！」

「そうですけど。」

「俺は天国の光神のニীগだ！よろしくな！」

光神！？霊界のトップの！？

「光神さんって霊界のトップですよね？」

「なんだしってんのか！？」

「まあ少しぐらいなら源さんに聞きましたし。」

「源三か。まあいい！ちよっとお前そこにたて。」

「はい。」

「ふうん。生身の人間がここまで強いとはねえ。」

なんでわかんのか？

「当たり前じゃん！慎くんはルクを倒したんだからね！」

「ルクつつうとナイトメア族のルクか？」

「そうだよ！」

「そいつはすげえなあ！」

「あのお：話しがみえないんですけど。」

「んっ？おお！わりいなあ」

「はい。」

「まあ！とりあえずお前なら舞花を任して平気ってことだ！」

「そうですか。」

「やったね！慎くん！」

「ああ。」

「さあて舞花久しぶりにイタズラしにいくかあ！」

「なんで!？」

「ほんとにいい!? やるやる♪」

「やめなさい！」

「仕事しないでいいんですか？」

「いいのいいの! 風神に任せておけば!」

「ひどっ！」

「大丈夫なんですか？」

「いいんだよ! 一週間仕事さぼっただけで風神怒るんだもん。」

「そりゃ怒るわ！」

「やっぱ遊ばないとな!」

「仕事しろ！」

「まあとりあえずメシ食ってってくださいよ。今から作るんで。」

「マジか!? 食ってく! 食ってく!」

「やったあ！慎くんの料理だあ！」

「じゃあちよつと待っててください。」

俺が作っている間舞花はニーグさんと何か作戦を立てていた。そして舞花が具現化したものをその辺に転がしていた。

「できましたよお！」

「おゝクリームパスタか！」

「やったあ！」

「「いったきまあす！」」

「そうだ舞花！再来週の土曜日に霊界運動会だけど出るのか？」

「うゝんどうしょ？慎くんは出たい？」

「競技による。」

「競技は死体転がしに生首いれデストラップ競走かなあ。あとはチーム全員リレーかなあ！」

気持ち悪い競技ばっかじゃねえかあ！

「じゃあ全部でる！」

俺の意見は！？

「そうか！じゃあ登録しとく！ちなみに死体転がしとデストラップ
競走は二人一組だからな！」

「わかったあ！」

いや！俺の意見聞こうよ！

「頑張ろうね！慎くん！」

「勝手にしてくれ。」

「よし！舞花そろそろ行くか！」

「うん♪」

「あっ！風神来たら魔界に行っちゃって言うって！」

「風神さんってどんな人ですか？」

「黒髪の髪の長い女だ！背中に扇を背負ってるからすぐわかる！」

へえ！背中に扇か。それってそこにいる人じゃ……

ニーグさんの後ろには黒髪で髪の長い女の人立っていた。

「！！？風神！？」

「見つけたわよ！」

「やべえ！んじゃな慎！」

そう言うところニグさんは黒い穴に入っていこうとした。

「逃がさないわ！風雨招来！」

風神さんが背中中の扇を振ると居間で嵐がおこった。

「ぎゃあああ！」

ぎゃあああ！居間が水浸しになったああ！

ニグさんは直撃してのびていた。

「まったく！人の迷惑を考えなさいよ！」

風神さんも俺の迷惑考えて技つかってください！

「舞花ちゃんもニグに便乗するのはやめなさい！」

「はあい…」

「あなたが舞花ちゃんの許嫁ね。大変だとおもうけど舞花ちゃんをよろしくね。」

居間の状況のほうが大変なんですけど！

「はい。」

「じゃあ私は帰るわね。運動会の時また会いましょう。」

「ばいばあい！」

「それじゃあまた。」

そういうと風神さんは黒い穴へ消えてった。

「あゝあ！イタズラでできなかったよ。」

「なにするつもりだったんだ？」

「風神さんの扇をうちわに変えようとしたの♪」

おまえも一緒につれてかれろ！

「それより掃除すんぞ！」

「やだあ！」

「このままじゃ畳腐ってカビ生えるぞ？」

「それはやだ！」

「じゃあやるぞ！」

「あっ！三途の川掃除屋に頼もうよ！」

可哀想だからやめてええ！

第18話：舞花の呪い！

「慎くん！アイス食べたい！」

「さっき食ったろ！」

「もう一個食べたい！」

「腹壊すからダメだ！」

「けちい！」

「なんとでも言え。」

「呪うよ？」

どうせしないんだからゆうなつつうの。

「やれるもんならやってみろつつうの。」

「ぶっ」

やっぱできねえ。

「ゴキブリとかだしたら晩飯抜きな。」

「じゃあ出さないで呪うもん！」

「魔界に集まり負の感情よ我が呼び掛けに応じよ……」

ん？また違う呪文だな。

「さすれば更なる負の感情生まれん！呪術アンラッキーデー！」

バリバリバリバリ！

ぎゃああ！なんだなんだ！？

「なにやった？」

「呪いかけた♪」

「なんの！？」

「今日1日不幸になる呪い♪」

嬉しそうにゆうなああ！

「呪いを解け！」

「明日になれば解けるよ♪」

ふざけんなああ！

ミシミシ！

なんだ？

ドカァン！

「ぎゃああ！」

床が抜けたああ！

「早速不幸が訪れたねえ♪」

くたばれクソが！

「ほら慎くん上がつて来なよ♪」

「……………抜けない……………体が抜けねええ！」

ヤバイ！どうしょお！？

「あははは！」

笑うなああ！

俺は10分後ようやく抜けた。

「これはいつまで続くんだ？」

「日付が変われば解けるよ♪」

時間はPM2…00過ぎだった。
あと10時間！？

「とりあえずじっとしてれば平気だよ♪」

そう言われて部屋でおとなしくすることにした。

グキ！

ぎゃああ！足がああ！

俺は部屋に向かう途中足を挫いた。

「舞花 ああ！ いますぐ解く方法ねえのか！？」

「ない！」

即答ですか。

それを聞いて俺はおとなしく部屋にいた。

「ねえねえ 慎くん！ 今日ご飯なに食べたい？」

「うまいもの。」

「私の料理はなんでも美味しいもん！」

嘘つけええ！！

「いいや。後で俺が作るよ。」

「指切るかもよ？」

「気をつけるから平気だよ。」

「ならいいけど♪」

そういつて舞花は部屋を出た。

ミシミシ！

ん？なんだこの音？

バタアン！

ぎゃああ！本棚があ！窓ガラスがああ！

突然本棚が倒れ正面の窓ガラスに突っ込んでいった。

「どうしたの！？慎くん！？」

「本棚が倒れて窓ガラスが割れた。」

「あちゃゝついてないねえ」

不幸の原因がゆうなああ！！

「とりあえず俺は一回寝るから5時くらいに起こして。その間に買い物しといて。」

「今日のご飯はなあに？」

「唐揚げ作るよ。」

「わかったあ♪じゃあ材料買っとくね♪」

「頼んだ。」

そして俺は眠りについた。

———PM5:00———

「慎くん！起きて！」

「ん？もう5時か。」

ズキン！

いゝででで！首寝違えた！

「どうしたの！？」

「寝違えた。」

「あゝあ。」

あゝあじゃねええ！

「とりあえず晩飯作るから。」

「わかったあ♪」

！！？

「舞花ああ！これは鳥肉じゃなくて豚肉だああ！」

「えっ！？ほんとに！？間違えちゃった！」

どうやったら間違えるんじゃないか！！

結局しょうが焼きに変更して晩飯を作り始めた。

この後俺は指を切ること5回火傷すること7回と生傷だらけになった。（腕中心に）

そして寝るとき雨が降ったらしく布団が濡れていて居間で寝ることになった。

こうして舞花に呪われた1日は終わった。

「慎くんがいじめたらまたかけるからね！」

俺はお前にいじめられとるわ！

第19話：運動会の練習！

「慎くん！運動会の競技の練習しよ！」

「今から？」

「うん！」

「晩飯の準備終わったらな。」

「はあい♪」

———30分後———

「でなんの競技の練習するんだ？ってか競技内容は？」

「じゃあまず死体転がしの練習しよ♪」

なにそのやな競技！？

「どうゆう競技なの？」

「ケルベロスってゆう魔獣の死体を転がして早くゴールしたほうが勝ちってやつだよ♪」

気持ち悪っ！！

「大きさはどんくらいあんの？」

「体長3メートルの重さは4、500キロぐらいかなあ♪」

かなあ♪じゃねええ！転がせるかあ！！

「普通に無理じゃね！？」

「大丈夫だよ結構体丸いし♪」

いやそうゆう問題じゃないだろ！

「っでどうやって練習するんだ？」

「じゃあケルベロスと同じくらいの丸太ですからそれで転がす練習
しよ♪」

近所迷惑だからやめなさい！

「ダメだ！」

「えー！じゃあ練習できないじゃん！」

「他の競技にしない！」

「じゃあデストラップ競走の練習！」

聞くからに危なそうな競技だな。

「どうゆう競技なの？」

「ええつとね。いろんなトラップがあるからそれを避けながらゴー

ルするってやつだよ♪ちなみに去年はトラバサミに濃硫酸の落とし穴に鋼鉄線が張り巡らされてたよ♪」

下手すりゃ死ぬじゃねえかああ！

「ちなみに霊界の人達は死なないからこうゆう競技できるけど慎くんは下手したら死んじゃうから気をつけてね♪」

ざけんなああ！だったらんなもん初っから出させようとするなああ！

「ここでできないなら魔界にいいところあるからそこでしょ♪」

「やだ！行きたくない！」

言ったそばから俺は黒い穴に引きずり込まれていった。

黒い穴を抜けると火山のようなものが目の前にそびえていた。

「あちらに見えますのが4地区最大の火山リグル火山でございまあす♪」

死ね！

「じゃあ登ろっか♪」

「あれを！？」

「うん♪」

「だってなんかてっぺんでなんか噴いてるよ？」

「そうゆう環境だから練習になるんだよ♪」

たかが練習に命懸けするかああ！

そうして俺達は火山を登り始めた。

シュボォー！

うおっ！なんかいっぱい出てきた！

「ほら慎くん！油断すると死んじゃうよ！」

てめえを殺すぞ！

「あとどんくらいで頂上？」

「あと1時間も登ればつくよ♪」

ここにきてすでに5時間立っていた。晩飯の心配をしたが場所によって時間の流れが違うらしくここは遅くなるらしい。

「ほら頑張って！」

「なんでお前そんな体力あるの？」

「よくマルスさんと魔界で修行したから♪」

余計なことを！

ガラガラッ！

ん？なんだ今の音？

俺は音がした上のほうをみた。

！！？落石！？

「舞花！岩が転がってきてる！」

「あれは私にも止められないねえ。」

冷静にゆうな！

「どうすんだよ！？」

「早くあっちに戻るよ！」

「おっおう！」

落石が当たる直前に黒い穴に入り間一髪難を逃れた。

「危なかったねえ♪」

嬉しそうにすんなあ！

「もう二度とあそこはいかねえ！」

「えっ？これから運動会まで毎日あそこで練習するよ？」

いやだあああ!!

第20話：舞花の料理！（調理実習）

「はい、では各班調理実習を初めてください。」

今日は家庭科の調理実習の日。なんとか舞花と班は一緒にならなかった。

「慎！早く作っちゃおうぜ！」

「そうだな！」

うちの学校は班で作るものを決め自分達で材料を持ってきて勝手に作りそれを先生が評価するという形式だ。

俺達の班はチキンソテーとサラダとスープとシンプルなものだった。

「美味しくできるかなあ？」

舞花達も始めてるようだった。

「出来たら慎くんにも食べさせてあげるからね♪」

心の底から遠慮します！

「舞花ちゃん！俺には！？」

俺と一緒にの班の悠太が言ってきた。

やめとけ！お前にはまだ未来がある！

「いいよお♪」

これ以上犠牲者ださないでえ！

「舞花達はなにつくるの？」

「鮭を焼いて自家製ソースをかけたやつとトマトサラダとスープだよ！うちはソースとスープつくるの♪」

誰だああ！？舞花にそんなの作らせようとしてるやつはああ！！

「まいちゅん！まいちんの料理の腕期待してるからね！」

「任せといてよ♪これでもうちは料理で世界征服できる女っていわれんだから♪」

スケールアップしてね！？確かに出来そうだけど！

そんなこんなで舞花達も料理を始めた。

「しんゝ。塩はこんなもんでいいのか？」

「もうちょい少なめにして。」

「あいよお！」

「生田くんこれはあ？」

「それは最後にいれて。」

なんか頼られんのっていいなあ。

そんなのんきなこと考えながら舞花のほうをみた。

ボォン！！

！！？なにごと！？

「あちゃっく比率間違えちゃった！」

なんの比率間違えたら爆発するの！？

「まいちくんそれは中濃ソースじゃなくてケチャップだよ。」

ツっこむとこちがくね！？

「田辺さん。気を付けなさいよ。」

先生まで！？普通料理してて爆発はしないよ！？

「あはは！舞花ちゃんはそのかつしいなあ！」

そうゆう問題じゃないだろバカ男！

「次は失敗しないようにしなきゃ！」

誰かとめてええ！

「しんくこれどんくらい焼けばいいのお？」

「両面に焦げ目付いたら弱火で焼けばいいよ！」

「生田くん！スープの味付けどうしたらいい？」

「塩と胡椒と味の素と醤油でしてえ！」

あとちょっとでできるなあ。

「まいちんソースできたあ！？」

「バッチシ！これは美味しいよ♪」

舞花の方をみると異常な数の調味料が並んでいた。

……あの班全員明日休みだな。

「スープはあ！？」

「もうできるよ♪」

鍋の中には真っ赤で異様な雰囲気を漂わす液体が並々と入っていた。

どうやったらあんな色になるの！？

「美味しそう」

どこが！？

「よし焼けたあ！」

「スープもおっけいだよ！」

「サラダも出来てるぞ！」

そんなこんなでうちの班は料理が完成した。

「生田の班は完成ね？どれどれ？」

「うん！大丈夫みたいね！ご苦労様！」

家庭科の先生からOKをもらい俺達は食べ始めた。

「おっ！うめえ！」

「おいしい〜！」

「うまいな。」

「慎って料理うめえなあ！」

「ほんとだよね〜」

「そりゃどうも。」

「キヤアアア！」

！！！？悲鳴！？

悲鳴のしたほうをみると先生が倒れていた。

まさか！？

「どうしたのお？先生？」

「どうしたんだ！？」

「なんか先生がうちの料理食べたら悲鳴上げて倒れちゃった。」

食べちゃったか……

「とりあえず先生ほっというて食べよつか。」

ほっとくなああ！

「そうだねえ♪」

同意するな！

仕方なく俺と悠太で保健室につれてくことにした。

「キャアアア！」

「うわあああ！」

！！？ また犠牲者がでた！

「あれえ？みんなどうしたの？」

どうしたのじゃねええ！

結局倒れた2人もつれ保健室に行った。

「なにがあつたの？」

「舞花の料理を食べたらこうなりました。」

「そう。まあ休ませてれば大丈夫でしょ。」

「分かりました。」

そして俺達もどるとクラスの半分近くが倒れていた。

なにがあつたの！？

「舞花ソースになににれた？」

「んっとなえ〜ケチャップにマヨネーズに重曹に七味に味の素にバルサミコ酢に塩だよ♪」

アホかああ！

「んでこれはなにがあつた？」

「みんなうちの料理食べて美味しさのあまり倒れちゃった♪」

勘違いすんな！

しかしそんな中なぜか隣のクラスのシゲが黙々と食べていた。

「舞花ちゃんの料理美味しいね〜♪」

なにいつてんの!?

「ありがとう♪もっとたべてえ♪」

「このスープはなにが入ってるの?」

「トマトとイチゴとカキを潰して煮ただけだよ♪」

それはもはやスープじゃなくてジャムだ!

「斬新だねえ! すごく美味しいよ!」

お前は勇者か!?

そして問題にもならずこのまま調理実習は終わった。

「あゝ楽しかったあ♪今度はなに作ろうかなあ?」

もう作らないでえ!

ちなみに余談だが舞花の料理を食べて気絶したやつはみんな目が覚めた後

「バルサミコ酢…バルサミコ酢…怖い…」と1日中言っただけの日学校をやすんだ。

そして舞花が卒業するまで調理実習が行われることはなかった。

第21話：霊界の運動会！（開会式）

「慎くん行くよお！」

「あいよお。」

今日は霊界運動会の日。俺達は霊界に行く準備をしていた。

「霊界ってどんなところなんだ？」

「行けば分かるよ♪」

そう言って俺と舞花は天井からでてる光の中に入っていった。

「…………あれ？ここ普通に今の世界と変わんなくね？」

目の前にはアスファルトの道路、コンビニ、ビル、そしてところどころに木が植えられていた。

「そうだよお♪天国地区は現世と表裏一体だからほとんど違いはないんだよ♪」

「でもそしたら死んだってゆうのわかんなくね？」

「三途の川地区でちゃんと手続きはするから大丈夫だよ♪」

「結構事務的なんだな。」

「うん♪」

「ところで、どこでやるんだ？」

「天国闘技場ってとこだよ♪ここから歩いて10分程度のとこだよ♪」

俺達は歩いてそこへ向かった。すると東京ドームの天井を無くしたような建物が見えてきた。

「あれだよ♪」

「でけえなあ。ん？あそこにいるのニীগさんじゃない？」

目の前に金髪の目立つ人がいた。

「ほんとだ！おーい！ニীগさあん！」

「おお！舞花に慎じゃねえかあ！よくきたな！」

「お久しぶりです。ニীগさん。」

「おう！とりあえず受付行ってこい！」

「分かりました。」

俺達は中に入り受付に行った。

「ではお名前の方を教えてください。」

「生田慎と田辺舞花です。」

「チーム愉快なおしどり夫婦のかた達ですね？」

なにそのチーム名！？

「そうでえす♪」

お前か決めたのは！？

「チーム名変えること出来ないんですか？」

「無理です。」

即答ですか。

「あら、慎くんは舞花ちゃん。」

「あっ！風神さんに雷神さん！」

風神さんのとなりには色黒で体格のいい日本刀を背負った男の人が立っていた。

「おめえが舞花の許嫁か！いい面構えしてやがるぜ！」

「はじめまして。生田慎です。」

「おう！俺は雷神だ！本名は真冬だが雷神の方が響きがいいから雷神って呼んでくれ！」

声でけえなあ。

「私は風神よ。本名は翡翠よ。みんな風神って呼ぶわ。呼び方は翡翠でも風神でもいいわ。こないだはバタバタしてて挨拶しそびれしそびれてごめんね。」

「気にしないでください。」

「風神さんと雷神さんは今年も組んでるんですかあ？」

「組んでるぞ！チーム名は自然災害だ！」

チーム名怖っ！！

「そっかあ！こちらはチーム愉快なおしどり夫婦だから！」

恥ずかしいからゆうな！

「そう、今年は絶対魔界地区に勝つわよ。」

「うん♪じゃあとでね♪」

「おう！じゃあなあ！」

そう言って2人は去っていった。

「そろそろ開会式始まるから闘技場に行こ！」

「わかった。」

闘技場に出ると魔獣や死神の格好をしたもの黒い翼の生えた人間などがたくさんいた。

「いろんなのがあるなあ。」

「地区ごとにいろんな種族がいるからねえ♪天国は人間は人間だけだけどね♪」

「ふうん。おっ！ニーグさんが出てきた！はじまんぞ！」

ニーグさんが前にでて喋り始めた。

「じゃあこれから4地区合同運動会をはじめる。開会の言葉なんてめんどくせえから一言で終わらす。死ぬなよ！」

すげえ！ほんとに一言で終わらせやがった！

「こないだ舞花死なないって言ってなかったか？」

「天国の人はね♪他の地区の人は死んじゃうよ！」

「こっちの人が死んだらどうなんの？」

「現世で生まれ変わるの♪でもこの人も寿命かよっぽど強い攻撃うけなきゃ死なないから大丈夫♪」

タフすぎだろっ！

そんなこんなで運動会は始まった。

第22話：霊界の運動会！（二人三脚& a m p；死体転がし）

「おゝい！ 慎！ 舞花！ お前らプログラムもらってないだろ？」

ニーグさんが紙を二枚もって走ってきた。

「あっ！ そんなのあるんですか？」

「おう！ ところでチーム名は気に入ったか！？」

あんたか！ あんなチーム名にしたのは！

「超気に入ったよお♪ありがとね♪」

「まあ気にすんなくて！ ちなみに俺は源三と組んでるから！ チーム名は仁義なき美男子だ！」

頭の悪さバレるからやめようよ！

「あのおゝチームってなんか意味あるんですか？」

「おう！ チームつつうのは2人一組で出る競技にでるためと最後のメインイベントの点取り合戦のでも必要だからな！」

「点取り合戦？」

「点取り合戦ってのは4地区で相手地区のチームの鉢巻きを取り合う競技だ！ 競技の結果で得た点がチーム点になり、鉢巻きを取った時貰える点なんだ！」

「つまり、活躍したチームほど鉢巻きを取った時の点が高いとゆうことですか？」

「そうゆうことになるな！ちなみに鉢巻きをとられたらそのチームの点が0になるから気を付けろよ！」

戦争そのものじゃねえかあ！

「ちなみにどの競技も反則なんかないからな！」

ルールぐらい作らんかい！

「ただいまより100メートル二人三脚を初めます。出場チームの方はスタート地点にお集まりください。」

「おっ早速出番か！じゃあ行ってくるぜ！俺のチームが出るから応援よろしくな！」

「はあい♪頑張ってねえ♪」

スタート地点を見るといろんな姿をした人（？）達が立っていた。

「頑張ってえ♪」

ニーグさんと源さんは一番最初に走るのか。

「位置についてよおい！」

パァン！！

「ワーワー！行けえ！！」

「行かせるか！必殺！太陽光発電！
ピカッ！！」

うわっ！まぶしっ！

ニーグさんを中心に白い光が出ていた。さすがに光神の名は伊達じやない。

「やれえ！源三！」

「まかせんしゃい！」

スパッ！スパッ！

源さんはもっていた日本刀で2組の足を結んでいた紐を切った。

「紐切られたら失格だかなあ！」

うわっ！汚なっ！

「うあっはっはっ！これが天国地区の力よ！思い知ったか！」

……あれ？4地区のチームが出てるはずなのに3地区しかないな。

「やはりそうゆう手を使ったかニーグ！」

！！？上！？

上を見るとマルスさんともう一人ナイトメア族が宙に浮いていた。

「ちいい！空飛ぶなんてずりいぞ！」

いや！あんたが言える立場じゃないから！

「ふんっ！紐を切るような奴に言われたかないね！」

マルスさんと組んでるナイトメアが言った。

「んだとお！おいっ！クー！降りて来やがれ！」

「やだね！マルス！ゴールするよ！」

「うむっ。」

そうゆうと空を飛んであっとゆうまにマルスさん達はゴールしてしまった。

結局二人三脚の総合は……

1位魔界、2位天国、3位地獄、4位三途の川となった

「続きまして死体転がしを始めます。出場チームの方はスタート地点にお集まりください。」

おっ！俺等だな！

「行くぞ舞花！」

「うん♪」

「頑張れよお！慎坊に舞花！」

雷神さんが観客席で叫んでいた。

「はあい♪」

「んじゃ行くぞ。」

「うん♪あっ！慎くんこれ渡しとくね！」

そうゆうと舞花は石で出来た剣のようなもの渡してきた。

「なんだこれ？」

「爆弾石で作った剣♪物に当てると爆発するんだあ♪当てる強さによって威力はちがうから上手く使ってね♪」

んな危険物もたすなあ！

「これをどうしろと？」

「それで死体転がせば1位とれるよ♪」

殺す気か！

「では、初めます。」

パン！

俺達死体へ走って行った。

予想の倍でかい！

目の前にはその辺の家ぐらいの灰色の3つの首がある犬が横たわっていた。

「物体浮遊術！」

「肉体強化！剛体術！」

やべえ！みんな術使ってどんどん先言ってるよ！

「行けえ！ホワイトウィンドウ！」

舞花も扇で強風を起こし少しずつ進ませていた。

「ほらっ！慎くんも早く！」

「んなこたあったって！」

「じゃあ慎くんがそれつかうまで他のチームの邪魔するから早く使って！」

そうゆうと舞花はマシンガンを出し他の地区に乱射した。

うわあっ！死神みたいなのがすげえ形相で逃げてるよ！

「あははは！！」

こいつ絶対楽しんでる！

!! そうだ!

「舞花今すぐこの剣出せるだけ出せ!」

「ちょっと待ってね♪」

そう言って舞花舞花は手を前に出し10本ほど剣を出した。

ゴールまであと200メートル! 行ける!

「舞花! さっきの風の技だして!」

「うん♪ ホワイトウィンドウ!」

ビュウウウ!

ヤバいもうすぐ魔界のやつらがゴールする!

「オラァ!」

ポオン!

俺は剣をおもいっきり投げて死体にあて爆発させた。

舞花の風と爆発の勢いで思ったより進んでいた。

「もう一丁!」

ポオン!

そしてすぐ魔界地区を抜かしゴールした。

「やったあ！ 慎くん勝ったよ！」

「おう！ やったな！」

「慎くんの決断がもう少し遅れてたら慎くんを打ってるところだったよ！」

あぶねええ！

愉快なおしどり夫婦＋80pt

仁義なき美男子＋60pt

現在総合……

1位魔界、2位天国、3位地獄、4位三途の川。

第23話：霊界の運動会！（騎馬戦）（前書き）

今ごろですが運動会編は結構長くするつもりなんでそのつもりで見てください＞（――；）＜

第23話：霊界の運動会！（騎馬戦）

「ただいまよりチーム騎馬戦を始めます。出場チームの方は所定の位置にお集まりください。」

「慎くん！応援いこ！」

「あゝ。ちょっとまで。マジで疲れたから。」

「ほら早くしないと始まっちゃうから！」

「わかったわかった。」

「風神さあん！雷神さあん！がんばってえ♪」

「あの二人でんのか。」

「ってか二人で騎馬戦なんか出来なくね？」

「おんぶしてやるから出来るよ♪」

なるほどねえゝ

「ちなみにルールは？」

「えっとねえゝ各地区2チームづつ出場して最後で生き残った地区の勝ちだよ♪騎馬が崩れるか旗をとられたら失格なんだあ♪」

「ふゝん。でもそれだとすぐ終わっちゃわない？」

「いや意外とみんなしぶといから結構長いよ♪」

「ふうん。」

「あっ！始まるよ！」

「んじゃ応援すつか。」

そう言って天国チームの方を見た。

うわぁ〜風神さんすでに扇構えてるよ。

「がんばってえ！」

うわっ！なんだあいつ大鎌持ってやがる！

白いローブをきた女の子が鋭く光る大鎌を構えていた。

死人出んじゃね！？

「合戦開始！」

スタートと同時に早速風神さんのチームが技を放った。

「『風雷合体技！雷の嵐！』」

雷神さんが日本刀を片手で振ると雷雲が現れさらに風神の嵐の技でグラウンドは雷雨と強風になった。

ビュウウウ！バリバリ！

「ギャアア！」

「うわあああ！」

ひでえ……

嵐が止む頃には2チームが潰れていた。

「あと残ったチームは手強いぞ風神！」

「問題ないわ。」

「ここはオジサンに任せなさい！」

………ん？今の声どっかで聞いたような……

「きゃー！おじさまがんばってえ！」

おじさま？ははっ。まさかね。

「任せなさあい！慎！舞花ちゃん！」

「おやじいい！！？」

なんであいつがいんの！？ってかあの黒人は誰！？

「舞花！どうゆうことだ！？」

「ニーグさんが来た日におじさまに運動会のことを話したら出たいって行ったからニーグさんに話したら出させてくれたの♪」

自由奔放すぎるわああ！

そんな会話をしてる間に親父達はすでに2チーム潰して残り2チームになっていた。

「残るは魔界地区と三途の川地区か！親父さんには三途の川地区を任した！」

「任せなさい！」

そうゆうと親父達は白ローブの女の子に突進していった。

「イクタサン！イキマススヨ！」

マススヨ！？

「行くぞ！アンディ！」

だから誰だよ！？

「私の相手をしますか。いい度胸ですね。」

「君可愛いねえ、何歳？」

ナンパするな！お袋にチクンぞ！

「たっぷり叫んでくださいね。」

ドS！？

白ローブの子は鎌を構え親父達に向かって行った。

親父もを構え持っていた十手で応戦した。

「銭形平次なめちゃいけないよ！」

アホか！死ぬぞ！

キン！キン！

親父強っ！

「やりますね。」

「ありがとう♪」

「ではこれはどうですか？ダークスネイク。」

女の鎌の先から黒い紐が3本出てきて親父達に襲いかかった。

「おっと！」

「メテオファイア。」

「甘い甘い。」

「ムカつきますわ。」

「親父さあん！こっちは片付いたぜ！」

「おつかれさあん！こっちももう終わらすからまって！」

「イクタサン。メントクサイカラ、シュリユウパンツカテイイデスカ？」

なにその危険なパン！？

「そうだなあゝ早く終わらせたいからいいよ。」

そうゆうとアンディさんが懷から手榴弾のようなものを5個をだし親父に渡した。

「あらよっと！」

親父はピンを抜きいっぺんに投げた。

「甘いすわ。」

白ローブの子はすべて真っ二つに切り落とした。

「はっはっ！足下にご注意！」

白ローブの子のチームの足下には6個目の手榴弾が転がっていた。

「しまっ……」

ドッカアァン！

エゲツねえ：

「勝者、天国地区！」

「らっくしょう！」

「やったの親父さん！」

「グスッ！卑怯ですわ！うわぁあん！」

白ローブの子が泣いていた。

「ごめんね〜」

「バカ！バカ！卑怯者！」

そう言いながら鎌を振り回しながら親父に襲いかかって行った。

「へっ？うわぁあ！！」

あの子危なっ！

「ちよっ！落ち着いて！うわぁあ！」

「殺して三途の川の魚の餌にしてやるう！」

こわっ！でも親父にはいい薬だからほっとくか。舞花も笑ってみて
るし。

「しんゝ舞花ちゃん！助けてえ！」

「がんばってくださいあい！おじさまあ！」

「うわああ！」

自然災害&mp;黒と黄色のコラボレーション（親父達のチーム）
＋100pt

現在総合順位……

1位天国、2位魔界、3位三途の川、4位地獄

第24話：霊界の運動会！（生首入れ）

「慎くくんもうすぐ生首入れが始まるよ！」

「わかった。ってかどうゆう競技なんだ？」

「えっとねえ、4チームで5分間で干し生首をかごの中にいっぱい入れた方が勝ちってやつだよ。」

そのうち天罰がくだんぞ！

「なにその気持ち悪い競技！？」

「楽しいよお♪ちなみに出るチームはうちらとニークさんたちと風神さんたちとおじさまのチームだよ。」

まあ都合のいい組み合わせだことで。ってか作者殺す！

「ちなみに妨害ありだから♪」

ふざけんな！

「おーい！慎！舞花ちゃん！」

でたなクソ親父！

「もうすぐ始まるから行こうか。」

「そうですね♪」

「生きてたのか。」

「あつたりまえよ！おじさんを誰だと思ってる！わが社の裏の支配者いく……」

ボコッ！

「くだらねえこと言ってねえで行くぞ。」

親父の顔面を一発殴り集合場所へ向かった。

「イクタサン！ドウシタデスカ！？」

でたな謎の黒人！

「親父…誰この人？」

「インドネシアでのパートナーのアンディ・ホワイトだ！」

ホワイトなのに黒人かよ！

「ハジメマシテ！アンディ・ホワイトデス！イクタサンノムスコノチンサンデスヨネ？」

そんな中国人みたいな名前じゃねええ！

「慎です。よろしく願います。」

「私は許嫁の舞花です！」

「ワァ！カワイイネ！ヨロスケネ！」

なんか微妙に日本語おかしいぞ！

「イクタサン！コノタイカイオワタラホントにイザベラノヒミツオシエテクレデスカ？」

「任せろアンディ！」

なに約束しとんじゃあ！

「ただいまより生首入れを始めます。出場チームの方はグラウンド中央にお集まりください。」

「おっ！来たな！舞花！慎！」

「ニーグさんやる気満々ですね。」

「あつたりまえよ！俺を誰だと思ってる！天国の支配者光神ニーグだぞ！なっ！？源三！」

親父と同レベルのアホがいた！

「ふふふっ！血がみたいのお。」

源さんこわっ！今は話しかけないようにしよっ。

そして風神さん達もきて全員揃った。

ちなみに雷神さんも親父とニーグさんと同じことを言っていたが風

神さんに吹っ飛ばされ最後まで言えなかった。

「ではこれより生首入れを始めます。」

「ヨオイ！」

パン！

「ウオオオ！」

「お前ら目え閉じろ！行くぜ必殺！太陽光発電！
ピカッ！

「風雨招来！」

「雷撃招来剣式の太刀！」

「落首神刀！」

開始と同時にニーグさん、風神さん、雷神さん、源さんが各地区に一人づつ技を放った。

「ギャアア！」

「うわああ！」

「助けてえ！」

ひでえっ！

まわりを見るとすべての地区の半分近くのチームが倒れていた。

「やるう♪」

「またあなたですか。」

ゾワッ！

殺気！？

後ろをみると白ローブの女の子がたっていた。

「おっお嬢ちゃんまた出てたの……？」

「ええ。とりあえずさっきの借りは返させてもらいますわ。」

「勘弁して？」

「問答無用です。」

「慎！舞花と一緒に生首入れといってくれや！俺達他のチーム潰してくる！」

「わかりました！」

「舞花サイコキネシス使え！」

「うん♪あっその前に♪」

舞花は日本刀を出し親父に渡した。

「おじさま！がんばってえ♪」

「まっかせなさい！」

「行きますわ。アイスニードル。」

ズガガガガ！

白ローブの子はツララを無数に出し親父に飛ばした。

「甘い！」

「また当たりませんか。」

「拙者も行くでござる！飛天御剣流九頭龍閃！」

いい歳こいてなにやっとなんじゃああ！しかも出来てるし！

「キャアア！」

「勝ちい♪」

強ッ！

ピー！

「そこまで！」

親父達の戦闘が終わると同時に生首入れは終わった。
今回俺ツツコミしかしてねえじゃん！俺の見せ場も作れよ！

結果は……

1位地獄、2位天国、3位魔界、4位三途の川

仁義なき美男子、愉快なおしどり夫婦、自然災害、黄色と黒のコラ
ボレーション+60pt

総合順位……

1位天国、2位魔界、3位地獄、4位三途の川

第25話：霊界の運動会！（デストラップ競走）

「ただいまよりデストラップ競走を開始いたします。出場チームのかたはスタート地点にお集まりください。」

「いこっ♪慎くん♪」

「ああ。」

「そういえばデストラップ競走はシリアさんがでるんだって♪」

「シリアって確かバンパイアのトップだよな？」

「そうだよ♪しかも4地区で5本指に入るくらい強いんだよ♪」

強っ！なんで舞花達にいたずらされてんだよ！？

「誰が一番強いんだ？」

「ニীগさんだよ♪」

あの人強っ！

「ふん。」

「あっ！あそこだよ♪」

目の前には振り子鎌や針穴などがあつた。

俺死んだな…

「シリアさぁん♪」

スタート地点の前に短い銀髪 of 髪に黒のマントを羽織った男が立っていた。

「舞花っ！」

「久しぶり♪」

「久しぶりだな！」

「シリアさん相変わらず見た目変わんないね♪」

「バンパイアは若い時期が長いからな！そっちの男は噂の許嫁か？」

「うん♪」

「はじめまして。」

「はじめましてだな！バンパイアのシリアだ！よろしくな！チーム名は血に餓えたコウモリだ！」

「よろしくお願いします。」

チーム名おかしいけどこの人すっげえまともだ！

「ふうん。なかなか旨そうな血をしてそうじゃないか。」

前言撤回します！霊界にまともな人はいない！

「慎くんの血を吸ったらピーマン口に詰め込むからね！」

普通ニンニクじゃない!?

「うっ!それだけはやめてくれ!」

いやがってるよ!

「じゃあ俺はもう行く!後でな!」

「うん♪」

シリアさんはそそくさと去っていった。

「なあ。普通バンパイアってニンニク嫌いじゃない?」

「そんなの嘘だよ♪バンパイアに弱点なんかないから♪」

「えっ?でもさっきピーマン嫌がってなかったか?」

「あれはただたんにシリアさんが嫌いなだけ!」

ガキか!?

「あっ!私たち第一走者だからもう始まるよ!」

「マジ!?!」

「うん!早く行こ!」

「今回のトラップはゴールまでの1キロの間にスパイクボールに地雷に鋼鉄線あと火炎放射に振り子鎌と針穴です。油断したら死にますから気をつけてください。」

冷静にゆうな馬鹿鬼！

「なおスパイクボールと鋼鉄線はあらゆる所にあるので気をつけてください。」

誰だこんな競技つくったやつは！

「では第一走者の方は位置についてください。」

「あっ！シリアさん♪」

「よう！またあったな！」

「1位はうちだからね♪」

「ふっふっふっ！今年は秘策があるから俺のチームが1位だ！」

「ではスタート！」

「いっけえ！慎！舞花！」

スタート同時にニীগさんの声が聞こえた。

やかましいなあの人。

「行くぞ！ブラッド！」

「おう！」

「「変化」」

シリアさん達はスタートと同時にコウモリに変身してコースの上を飛んでいた。

「はっはっはっ！1位はもらったあ！」

プチ！

「ん？なんだあ？」

スパアン！

「「ぎゃああ！」」

シリアさん達が空にあった糸を切ると両脇から棘のついた泥ダンゴが飛んできて見事に命中した。

空にもトラップあるんかい！

「シリアさん達が墜落したあ♪」

嬉しそうにゆうなああ！

「こんなこともあろうかと空にもトラップを仕掛けといたのさ！」

ニーグさんが笑いながら言っていた。

あの人すげえ！ってかどうやったんだよ！？

俺達はトラップに注意しながら進み最初の関門振り子鎌についた。
ちなみに来る途中見事にスパイクボールに引っ掛かった魔界チーム
が倒れていた。

「どーする？ 慎くん？」

「突っ切るしかないだろ。」

「だね♪」

俺達はタイミングを見計らい振り子鎌を突っ切った。

そのまま三途の川チームを抜かし1位の状態で半分の地点まで来た。
そこには無数のスイッチと壁に穴があるところに着いた。

「とりあえず突っ切るぞ！」

「大丈夫かなあ？」

「早く行かねえと抜かれちまうぞ！」

カチッ！ゴオオオ！

ぎゃああ！髪が焦げたあ！

スイッチを踏むと横から炎が出てきた。

「だから言ったのにい！」

なんもいってねえじゃねえか！

「どうする？」

「こないだ魔界に行った時の刀出せるか？」

「出せるよ♪」

そうゆうと舞花は刀をを具現化した。

「よしこれで……」

俺は剣を振り氷の珠を無数に出した。

「これでふさがってろ！」

氷の珠を飛ばし炎の出る穴をふさいだ。

「慎くんすごおい♪」

「これで一回くらいは平気だろ。」

「うん♪じゃあ行こっ♪」

俺達は走り抜け火炎放射のトラップを抜けた。

「なんかあそこ土の色ちがくね？」

「多分地雷だよ！あと100メートルくらいだけど慎重に進も！」

「そうだな。他のチームともそうとう離れてるしな。」

そう言って前の土を少しずつどかしながら進んで行った。

「はっはっは。見事に復活したぜ！もうトラップには引っかかんねえぞ！」

！！？ シリアさん！？

「空はトラップだらけだから走って来たぜ！」

ヤバイ！あと50メートルくらいなのに！

「一気にゴールだ！ブラッド！」

「おう！」

シリアさん達は俺達を抜かしゴール寸前だった。

「よし勝ったああ！」

カチッ！

「ん？」

「なんだ？」

ボオン！

シリアさん達はゴール直前に地雷を踏み吹っ飛ばされた。そしてそのまま後ろにあった針穴に見事入った。

うわぁ……お約束をやりやがった！ってか生きてるか！？

そして俺達はシリアさん達が伸びてる間にゴールした。

「なんかあっけなかったな。っつーかあの人達いきてるか？」

「大丈夫だよ♪バンパイアは首を叩き落とさない限り死なないから」
♪

不死身じゃん！！

愉快なおしどり夫婦＋100pt

デストラップ競走第一レース結果……

1位天国、2位三途の川、3位地獄、4位魔界

デストラップ競走総合結果……

1位三途の川、2位天国、3位地獄、4位魔界

総合結果……

1位天国、2位三途の川、3位魔界、4位地獄

第26話：霊界の運動会！（全員リレー）

「ただいまより全員リレーを始めます。選手の方達はスタート地点にお集まりください。って何回似たようなこと言わせんだよ！競技名違うだけじゃねえか！作者も工夫しやがれ！死ね！」

なんでキレたの！？

「あはははっ！おねえさんがキレた！あはははっ！」

ツボに入っちゃったよ。

「去年と同じキレかただあ！あはははっ！」

去年もキレたの！？

「あははは！」

……もうツツコミする気力もねえよ。

俺はとりあえず笑っている舞花を引っ張ってスタート地点に向かった。

スタート地点に行くと各地区30人くらい集まっていた。

「慎坊！舞花！こっちだ！」

「雷神さん！」

「なんだお前らも出るのか！」

「ううん！ 慎くんだけ♪」

はっ！？

「そうかそうか！ 慎坊頑張れよ！」

「頑張ってね♪ 慎くん♪」

ふざけんなああ！

「慎坊はアンカーの一つ前を頼むぞ！」

「はっはい……」

「俺は最初に走って一気に突き放すから楽しみにしとけ！ ちなみにアンカーはニードだからな！」

うわぁ〜きつと戦争状態になるんだろうなあ〜

「では第一走者の方はスタート地点についてください。」

「では、ヨオイ！ ドン！」

「って言ったらスタートして下さいね。」

小学生か！！

ギロツ！

「いっいや！軽い冗談ですって！ホントすいま……ぎゃああ！」

ドカツ！バキッ！バリバリバリ！

雷！？

「てめえなめた真似してんじゃねえ！」

うわぁあの鬼リンチ喰らってるよ。ってか雷神さんかよ雷だしたの！可哀想に。

「えー。では改めていきます。ヨオイ！」

パン！

「雷撃招来！」

「血刃・剛波斬！」

いきなり技を出すなあぁ！

開始と同時に両端にいた雷神さんと三途の川地区の死神のような人が技を出し間にいた地獄と魔界地区が犠牲になった。

「てめえもか！」

「そうゆう貴様もか！」

「真似すんじゃねえ！」

「それはこちらのセリフだ！」

そんな言い争いをしながらトラックを一週し次の走者にバトンを渡した。

※トラック一週は400メートルです。

「頼んだぞ風神！」

「いけ！我娘よ！」

そこには親父と2度対峙した白ローブの子がいた。

「任せてください。お父様。」

あれの娘かよ！

「あの子クリアさんの娘だったんだあ！」

「クリアさん？」

「三途の川の最高責任者のデス・クリアさんだよ！」

「えええ！？」

「口調が違うから全然分かんなかったよ！」

「クリアさんってどんな人なの？」

「イタズラが不言実行になったニীগさんかな？」

タチ悪っ！

風神さん達の方を見るとトラックを半分過ぎた所で風神さんと白ロ
ーブの子が戦闘を始めていた。

「暴風招来！」

ビュオオオッ！

「メテオファイア。」

ボオン！ボオン！

白ローブの子に向かい風が吹き風神さんに向かって球状の火の玉が
空から無数に落ちてきた。

なにこの地球の終わりみたいな光景は！つかお前らちゃんと走れ！

「やりますね。」

「あなたもね。あなた名前は？」

「ミリー・クリアです」

登場3回目にしてようやく名前がでたよ！

「いい名前ね。じゃ終わらせてもらおうわ！ウィンドプレス！」

ドン！

「キャアア！」

突然ミリーが吹っ飛ばされその間に風神さんが次の走者にバトンを渡した。

まあとりあえずこっからはどの地区も知らない人なので省略させてもらうわ。文句があるなら作者まで♪

いかんいかん！なんか今俺キャラ変わったぞ！

そして22走者まで走り終わった。

今のところ順位は1位天国、2位地獄、3位三途の川、4位地獄だった。そして次の地獄の走者がシリアさんだった。

「はっはっはっ！天国など軽く抜かしてくれるわ！変化！」

あっ！ずりい！

「あれ反則じゃね！？」

「この運動会はなんでもありだから♪それにニーグさんがなにもしないはずがないから♪」

「ぎゃああ！」

舞花がそう言った直後シリアさんの悲鳴が聞こえた。

上を見るとまたスパイクボールに落とされたシリアさんがいた。

まだあつたんかい！

そして地獄は一気に最下位に落ちた。

このまま順位が変わらないままとうとう俺の番が回ってきた。

他の地区と相当離れてるから平気だろ。

「行けえ！慎坊！」

雷神さん声デカッ！

そして俺は全速力でトラックを走った。

パカラッパカラッ！

ん？なんだこの音？

パカラッパカラッ！

だんだん近くなってるような……

後ろ見ると物凄い勢いで走ってくるマルスさんがいた。

えええ！？あんた足速すぎだから！

「慎殿抜かさせてもらうぞ！」

ちつくしよお！ただ抜かさせるか！

俺はマルスさんの背中に乗りしがみついた。

「いくら慎殿でも私の背中に乗るのは許さん！振り落としてくれる！」

うおお！ヤバイ！落ちるうう！

俺は必死にしがみつきなんとか一週した。

「ニーグさん頼みます！」

「任せな！慎！」

すでにニーグさんの前を魔界地区のアンカーが走っていた。

「ゴールはさせねえぜ！必殺！光刃・飛翔斬！」

ニーグが白く輝く剣を横に振ると白く光る剣圧が出てきて魔界地区の走者に命中した。

「へっ！タイタンなんか遅れはとんねえぜ！」

「きさまああ！私を愚弄するかああ！」

「知らねえなあ！俺はゴールさせてもらうぜ！」

ニーグさんはもうゴールまで50メートルくらいのところまできていた。

「うおおお！秘技大地の怒り！」

F○の技じゃん！

タイタンさんが地面を殴ると立ってられないほどの自身が起きた。

まんまF○かよ！

「うおっ！」

「はっはっは！まいったか！」

「いや全然！俺は別にこれでも走れるし！」

バケモンかあの人は！

そのままニークさんはゴールし見事1位になった。

「ねえ、慎くん！私今回ほとんど出てないよ！」

知るか！！

全員リレー結果……

1位天国、2位魔界、3位三途の川、4位地獄

愉快なおしどり夫婦、仁義なき美男子、自然災害＋100pt

総合順位……

1位天国、2位魔界、3位三途の川、4位地獄

第27話：霊界の運動会（点取り合戦 前編）

「慎くん！次でいよいよ最後の競技だよ！」

「そうだな。」

時刻は12時。今から昼休みで13時から点取り合戦らしい。

「メシはどうすんだ？」

俺は恐る恐る舞花に聞いた。

「お弁当が支給されるからそれ食べよ♪」

よかったあ！弁当支給してくれてありがとう！ニークさん！

「んじやとつと食っちまうか！」

「なんか慎くん嬉しそうじゃない？」

やばっ！！

「んなことねえよ。ほら、早く取ってきて食おうぜ。」

「ふうん……まあいいや♪早くたべちゃお♪」

ふーとりあえず切り抜けたか。

俺達は入り口で配ってる弁当を取りに行き適当な場所で食べ始めた。

「そういえばさ、点取り合戦以外の競技がこんな早く終わっているのか？」

「大丈夫だよ♪点取り合戦は制限時間2時間だから♪」

長っ！！

「体力持つのか？」

「大丈夫だよ♪みんな霊体でタフだから♪」

俺は生身の人間だああ！

「あとさ、点数はどうなってんだ？」

「あそこのボードにチームと地区の点が載ってるよ♪」

舞花が指を指した先を見るとでかいボードがあった。

「一緒に見に行こ♪」

「ああ。」

俺達はメシたいらげボードに向かった。

ボードの前につき点数をざっと見た。

（地区別、順位得点表）

1位天国380pt

2位魔界360pt

3位三途の川330pt

4位地獄300pt

(地区別チーム、順位得点表)

(天国)

1位愉快なおしどり夫婦340pt

2位自然災害260pt

7位仁義なき美男子220pt

12位黒と黄色のコラボレーション160pt

………1位?

「やったあ!! 慎くん! うちら1位だよ!」

ええええ!?

「確かこの点数高いほど相手に狙われやすいんだよね?」

「そうだよ♪ちなみに各チームに地区のポイントが加算されるから♪だからあの点数に+380ptだよ♪」

ふざけんなああ!!

「かなり危険ってことだよな？」

「まあね♪チームで300pt越えてるのはうちらとマルスさん達だけだからね♪」

死ねええ！

（やばい！どうする！？逃げるか！？いやっ！こいつが逃がすわけない！でも死にたくない！俺の選択肢は2つ！逃げて舞花に殺されるか、点取り合戦やって死ぬか。正にデットオアアライブ！）

※ただいま慎はパニックで頭がおかしくなっております。ご了承ください。ちなみにどっちを選んでも死にます。

「逃がさないよ？慎くん？」

「やっぱダメ？」

「うん♪」

だったらヤンキーの根性見せてやる！あつ俺一応不良だからね！最近その設定消えかかってるけど……

「じゃあもう始まるから行くよ！」

「えっ？だってアナウンス流れてないよ？」

「アナウンサーのお姉さん帰ったからなくなったの♪」

仕事放棄！？

「じゃあ行くよ！」

「おう！」

「おっ！来たか！」

「ニীগさん！」

「よっ！慎達やるなあ！どうどの1位だぞ！」

「ありがとうございます♪」

「だから大将は任せたぞ！」

はい？

「大将ってなんですか？」

「点取り合戦は地区ごとに大将がいて大将がやられた時点でその地区はリタイアでそれまで取った点数が最終得点になる！」

責任重大じゃねえかあ！

「まっ！がんばれよ！一つアドバイスしてやる！鉢巻きはチームで1つ、そして大将は個人じゃなくてチームでやる。だから2人1組ってゆうのを利用しろ！」

……………そうか!!

「ありがとうございます！ニীগさん！」

「がんばれよ！大将！」

「では、これより最終競技点取り合戦をはじめます。各地区陣地に集まりスタートの合図を待ってください。」

俺達是用意された陣地に行きスタートを待った。

待ってる途中ニীগさんがみんなを呼び円陣を組み始めた。

「おめえら！今年は優勝すんぞ！」

「「おおー！！」」

みんな気合い入ってんな。

「攻めて攻めて攻めまくれ！！」

「「おおー」」

「行くぞー！天国地区が！！」

「「優勝だあ！！」」

「では！スタート！！」

会場にスタートの音が響き点取り合戦が始まった。

次回へ続く！

第28話：霊界の運動会！（点取り合戦 後編）

「よっしゃ！俺は魔界地区を攻める！行くぞ！源三！」

「任せんしゃい！」

「んじゃおじさんは三途の川地区攻めるねえ」

「イクタサンシユリユウパンノジュンビOKデス！」

「おし！行こうか！」

「うちのチームと慎坊のチームは地獄地区へ行く！」

「わかりました！行くぞ舞花！」

「うん♪でも慎くんの作戦上手くいくかな？」

「大丈夫だ！」

こうして俺達は各地区へ向かった。

「天国チームのトップがいるぞ！」

早速かよ！

「来たなあ！慎坊ここは任せて地獄の大將を探せ！」

「はい！」

「うちも戦いたい」

アホか!!

「頑張ってね慎くん。」

「任せて下さい!」

「慎くん!はい!」

走ってる途中舞花から木刀が渡された。

「なにこれ?」

「太陽樹っていうスツグく硬い木で作った木刀だよ♪集中すればニ
ーグさんの技ほど強くないけど光りも出せるから目潰しにもなるよ
♪」

「ありがとう。」

「えへへ♪ほめられたあ♪」

そうこうしてるうちに地獄地区のチーム2組と遭遇した。」

「お前らか。天国地区のトップは。」

「だったらどうする?」

「鉢巻き貫うぜ!」

2組のうちの1組が俺に襲いかかってきた。

「ちっ！舞花大丈夫か！？」

「大丈夫だよ♪うちはこっちのチームの相手してるから♪」

そういいながら舞花は鞭で素振りをしていた。

「よそみしてる暇はないぜ！」

ドカアン！

黒い翼を生やした男が俺に向かって拳振り上げた。

「なかなかすばしっこいな。」

「そりゃどうも。」

そう言った瞬間背後に気配を感じた。

ヒュッ！

「おわっ！」

後ろを向くと細身の全身緑の鱗がある男が剣を振ろうとしていた。

「やるねえ！」

「雑魚が調子乗んなよ！」

俺は木刀を構え戦闘体勢に入った。

「ふんっ！私と剣で勝負とはいいい度胸だ！来い！わっば！」

「おらぁ！」

「むっ！やるな！だが……」

「後ろがから空きだぜ！」

「ちっ！」

とっさに後ろを向き攻撃を防いだ。

「やるな。一つ聞くが鉢巻きを持ってるのはわっばか？」

「俺に勝ったら教えてやるよ！」

「ではその懐にあるのはなんだ？」

「ただの布だ！」

「ふんっ！みえすいた嘘を！」

作戦成功！ちなみに作戦とは舞花が適当な鉢巻きを出し本物を攪乱する作戦だった。ちなみに本物は舞花が持っている。

俺は体勢を立て直し二人の前に立った。

「一気にカタをつけてやる！我流剣術！迅風裂刃！」

二人に突進し鳩尾に一撃つつ喰らわした。

「やるじゃ……ねえ……か。」

「無念。」

二人は気絶し蛇男から鉢巻きをとり舞花のもとへ向かった。

「あっはっはっ！」

……舞花の笑い声？

「ほら！ ゆうこと聞かないとまた鞭で叩くよ！」

舞花のもとにつくと蛇男に似た男二人が正座させられ泣いていた。

「ほんともう勘弁してください……」

「うるさあい！」

スパアン！

「いや……でも……」

「喋るなあ！」

スパパアン！

ひどっ！ つか女王さまになつとる！

「蛇臭い！」

スパパァン！

理不尽だろ！ってかなんだ蛇臭いって！？

あまりにも酷い光景なので俺が止めに入った。

「おいっ！舞花！」

「あっ♪慎くん♪」

「なにしてんだ！？」

「蛇男をいじめてんの♪」

アホかああ！！

「可哀想だからやめなさい！」

「ちえっ！いいおもちゃだったのに！」

そう言って舞花は蛇男二人を解放した。

「ほら！鉢巻きを置いて出てく！」

スパパァン！

ひどっ！！

こうして蛇男二人は泣きながらこの場を後にした。

「そう言えばねえ、地獄の大將はシリアさんなんだって♪」

「なんで知ってんの？」

「あの二人が言ってた♪」

あの二人も可哀想に……

「とりあえずシリアさんを探すか。」

「シリアさんは三途の川地区に向かったらしいからそっち行けばいいよきつと♪」

「わかった。」

これ以上つつこむのは怖いから軽く流して三途の川地区の陣地に向かった。

つつうかここ広すぎだろ！なんだよ東京ドーム2個分って！

俺達はやっこの思いで三途の川地区の陣地に着いた。

親父達が大将を倒したのか三途の川地区はリタイアになっていた。

そして制限時間はあと半分の1時間になっていた。

「呼んだら出てくるかな？」

出てくるわけねえだろ！

「呼ぶなよ？」

「いいじゃん♪ものは試しだよ♪」

「シリアさあん!!」

舞花が大声で叫んだ。

まさか地獄の最高責任者が出てくるわけないよな。出てきたらうちの親父並みにアホだな。

「はいよお!!」

でできたあ! しかも満面の笑みで手を振ってるよ!

「なんか用？」

なんか用じゃねええ! あんたアホかあ!

「鉢巻きちょうだい♪」

くれるか!!

「無理!」

ほらな!

「じゃあ力づくで奪うもん! 慎くんが!」

俺!?

「うちはブラッドさんの相手するから慎くんはシリアの相手してね♪」

ちよつとまてえ！

反論するひまなく舞花はブラッドさんに突撃していった。

「じゃあこつちも始めるとするか。」

俺は木刀を構えシリアさんを睨んだ。

「いい眼力だ！それでなくちゃ面白くない！」

そういうと突然シリアさんが視界から消えた。

ヒュッ！

！！！？後ろ！？

ガッ！！

つぶねえ！

間一髪攻撃を防いだ。

「おっ！俺の攻撃を防ぐとは思ったよりやるな！」

「じゃなきゃ死んじゃいますからね。」

「そう言えば慎は生身だもんな。」

「ええ。」

「まあ死にはしねえから平気だろ。」

「勘弁してください！本気で行きますよ！我流剣術！奥義！翔龍風迅剣！」

シリアの右に回り込み右脇↓頸椎↓左脇↓鳩尾を打ちそして跳んだ勢いで顎を打った。

「うおっ！」

「やったか！？」

「なかなかいい攻撃だ！」

「ちっ！まだか！」

「あっはっはっ！」

笑い声！？

スパァン！

まさか！？

横を見るとブラッドさんが泣きながら正座をしていた。

可哀想に……

俺は前を向き再び戦闘体勢に戻った。

ヤバいな！どうする！

……そうだ！！

「行くぜ！」

ピカッ！

木刀を光らせその隙に攻撃をした。

「うおお！笠木流剣術！雷雨風翔剣！」

「やるな！だがこの程度じゃ俺を倒せん！」

「シリアさあん！リリーさんのことばらしていい！？」

「それはやめろ！舞花！」

バカァン！

俺の攻撃が見事にシリアさんの後頭部に当たりシリアさんは撃沈した。

なにこの終わりがた！？

「やったあ♪」

「点取り合戦終了！」

シリアさんから鉢巻きをとると同時に終了のアナウンスが流れた。

「終わった？でもまだ時間あるぞ？」

「多分うちの地区以外の大将がやられたんだよ♪」

「なるほど。それにしても疲れたあゝ」

「じゃあみんなの所に戻る♪」

「ちょっとまって！マジ疲れた！」

「大丈夫！ブラッドさんがおんぶしてくれるから。」

可哀想だからやめろ！

こうして点取り合戦は終わった地獄地区の人3人の心に深い傷を残して……

「下僕が増えたよ♪」

もう一回くたばりやがれ！

点取り合戦結果……未集計。

第29話：霊界の運動会！（閉会式）

「ふー！疲れたね！」

「だな！とりあえず全力を尽くしたしな！」

「そういえばもうすぐ結果発表だよ！」

「そっか。とりあえずニীগさんのところ行くか！」

俺達はニীগさんがいるグラウンドの中央にいった。

「よう！慎！おつかれさん！」

「おつかれさまです！」

「ニীগさん！おつかれさん！」

「おお！舞花！久々に女王様モードのスイッチが入ったらしいな！」

「うん♪」

「女王モードって何ですか？」

「舞花が鞭を持った状態で敬語使ったり腰の低い態度取ったりする
となるやつだ！」

こわっ！！ってかそれで舞花変だったのか。

「まあそうゆうことは打ち上げの時に話そう！」

「分かりました。」

「じゃあ俺は行くわ！」

「あっ分かりました！」

「あとでねえ♪ニীগさん♪」

そう言ってニীগさんは去っていった。

「慎坊！舞花！」

「慎くん！舞花ちゃん！」

「慎！舞花ちゃん！」

「雷神さん！風神さん！それにおじさま！」

「やるなお前ら！あのあと地獄のトップ3全員倒したんだってな！」

「すごいわね！」

「さすが我が息子にその嫁だ！」

へっ！？あいつらトップ3だったの！？

「すごいでしょ♪」

「あいつらトップ3だったんですか!?!」

「そうだぞ! 特に慎坊が倒した剣士と蛇男のチームは毎年上位のやつだぞ!」

「凄いじゃん! 慎くん!」

「さすが我が息子!」

さっき聞いたわ!

「さすが舞花ちゃんの婿じゃ!」

源さん!?! いつの間に!?!

「源さんいつからそこにいたのお?」

「ずっと居たぞお!」

何者ですかあなた!?!

「ほっほっほ! すごいじゃろ? このぐらい朝飯前じゃ! それより慎くん……」

「なんですか?」

「舞花ちゃんにケガさせてないだろうな?」

ぎゃああ! 殺人鬼モードになってるう!

「さっさせてません！」

「そうかい。ならいいんじゃが。」

よかったあゝこの人こええよ！

「慎くん。腕ケガしてるわよ。」

「あつ。ホントだ。」

「手当てしてあげるからこっちきなさい。」

「ありがとうございます。」

「気を付けなさいよ。」

「はっはい。」

この人普通に超綺麗だ！やばい！緊張する！

下を向いてそんなこと考えてると腕に突然激痛が走った。

ビシャッ！！グリグリ！

ぎゃああ！！染みるう！！ってかグリグリすんなああ！

前を見ると怒った舞花が目の前にいた。

「慎くん？何デレデレしてるのかな？」

「してねえって！ってか顔怖いって！」

「ただいまより閉会式ですのでグラウンドにお集まりください。」

助かった！

「ほら！舞花閉会式始まるから行くぞ！」

「ちっ！じゃあ行こうか！」

こいついま舌打ちしやがった！

「慎！いつの時代も男が苦勞するもんだ！だから耐えるんだ！」

てめえは自由奔放に生きてお袋に苦勞かけてんじゃねえか！

「慎坊行くぞ！」

「あっ！はい！」

そして全員で人だかりの所に行き閉会式が始まるのをまった。

「えーじゃあこれから閉会式と結果発表を始める。」

やる気ねえよ！あの人！

「えーつと4位560pt地獄、まあシリアのせいだなこれは。」

あんた何いってんの！？うわぁ……シリアさんボコボコにされてるよ……

「3位、620 pt 三途の川、あそこは川しかないからな。」

おいこら！何ケンカうつとんじゃ！

「2位、750 pt 魔界、まあ俺が最後に潰したから当然かな。」

挑発すんな！

「んでもって1位、1080 pt 天国、まあ俺様がいるから当然の圧勝だな！」

そこまでいって天国以外の地区が暴動を起こし色んな種族の人間が入り乱れてニーグさんをボコボコにした。

「うらあ！うちの地区は森だってあるわ！」

あんまかわんねえよ！

「シリアさんはケンカは強いけど頭が残念な人だから仕方ないんだよ！」

フォローしてんの！？ってかなんでそんな人が地獄の最高責任者なんだよ！？

それをわかってなのか毎年のことなのか誰も止めなかった。

「てめえが人参もってこなきゃうちが優勝してたんだよ！」

人参！？

しばらくニーグさんはボコられ暴動終わると発表を再開した。

「うつ……じゃあ最後にMVPを発表する。天国地区……愉快なしどり夫婦チームポイント650pt!」

「んじゃこれで第10回4地区合同運動会を終了する!」

こうして運動会は終了した。

「打ち上げで下僕3人と遊ぼ♪」

可哀想だからやめなさい!

「これで次回の伏線もできたし完璧だね♪」

いらんことゆうな!

第30話：運動会の打ち上げ& a m p; 30話突破記念宴会！（前書き）

なんだかんだ30話行きました！ここまでついて来てくれた皆さん
本当にありがとうございます！これからも幽霊と結婚！？の応援を
よろしくお願いします！

第30話：運動会の打ち上げ& a m p; 30話突破記念宴会！

「え〜ではみんなおつかれ！それと30話突破おめでとう！かんぱあい！」

「かんぱあい！」

運動会が終わり2時間後天国地区の居酒屋の広い座敷で天国地区と地獄地区で打ち上げが始まった。

「ひんふん！ふおれおいひいよ！」

「口にももの入れて喋んな！」

「ふあい♪」

「慎！楽しんでるか！？」

「あっ！ニীগさんだぁ♪」

「楽しんでますよ！」

「そうか！いやぁ優勝しちまったなあ！」

「ですね。」

「なんだ？元気ねえな？」

「いやちよつと疲れたんで。」

「そうか！でもなあ打ち上げがなきゃあそこの片付け手伝わされてたぞ！」

なんで！？

「でも全部風神に任せて打ち上げだ！」

悪魔か！！

「ニーグ！やっと見つけたわよ！」

「やばいっ！おれは逃げる！じゃあな！」

「逃がさないわよ！風切り！」

スパスパスパッ！

「ぎゃあああ！」

風神さんが扇を振るとニーグさんに切り傷が大量に出来た。

生きてるか！？

風神さんの横には同じ状態で倒れた雷神さんもいた。

「今日とゆう今日は許さないからね！」

「いやでもやっぱ遊びたいじゃん！」

「あんたは一週間の3分の2を遊んで過ごしてるでしょ！」

うわぁ……風神さんこええ……

「まあまあ落ち着け風神！」

「あんたもあんたで私の仕事とあんたの仕事変えてるでしょ！？しかも簡単なのと難しいやつを！」

「いやっ……それは……その……」

「大体あんた達はね……」

これ以上聞きたくないので俺は舞花を連れてその場をあとにした。

「慎くん♪チューしてえ♪」

「おまえなにいつて……うわっ！酒くさ！」

「飲んでないよお♪不思議なジュース飲んだだけだよお♪」

そりゃ酒だ！

「何杯のんだ？」

「このコップで10杯くらい♪」

それはコップじゃなくて大ジョッキだろ！ってかあの短い間にそんな飲んだのかよ！

「もう飲むなよ？」

「やだあ！」

「やだじゃない！ダメだ！」

「けちっ！慎くんのピーー！」

久々だな放送禁止用語。

「ピーーでもいいからダメだ！」

「けちっ！」

そう言って舞花はすねてしまった。

「よう！慎！」

「あっ。シリアさん。」

「飲んでるか！？」

「おれ未成年なんですけど！？」

「関係ない！飲め！」

命令かよ！！

「それより舞花をなんとかしてください！」

「おうちよつと待ってろ！」

「舞花！これ飲め！」

酒をすすめるなあ！！

「ありがとう♪シリアさん♪」

ボン！

なに！？

舞花のほうを見ると顔から煙をだして倒れていた。

「なにがあつたんですか？」

「舞花にこれ飲ませた！」

シリアさんはケルベロスの絵が書かれたビンを持っていた。

「なんですかこれ？」

「地獄の名産品ケルベロスウィスキーだ！アルコール度数99.9%だ！」

ただのアルコールじゃねえか！

「あとの0.1%はなんですか？」

「ケルベロスの体液！」

アホか！

俺は舞花端に寝かせ店の外にでた。

「おっ！ 慎じゃないか！」

「久しぶりね。 慎。」

「親父！ お袋！」

「久しぶりね。」

「どうやって天国来たんだ？」

「ニীগさんに迎えにきてもらったのよ。」

「そうか。」

「慎。 父さん達がいなくなってからしっかりやってるか？」

「まあな。 毎日ツツコミの嵐だけどな。」

「そうか！ 舞花ちゃんが来てからお前久しぶりに笑うようになったもんな！」

「そうか？」

「そうよ。 絵梨ちゃんが亡くなってから一度も笑ってなかったもの。」

「そっか。舞花が来てから学校じゃ舞花が校長とかのカツラ飛ばしたり燃やしたりして家帰っても魔界連れてかれるは霊界の運動会出されられて疲れるけど楽しいからな。」

「そう。よかったわね。」

「なあ！慎！絵梨ちゃんに会いに行かないか！？」

「はあっ！？」

「ここは天国だぞ！ニーグに言えばすぐ見つかるだろうし！」

そういえばそうだな。

「でも…俺は…」

「慎くん♪なあにやってんのよ！」

「うおっ！お前もう復活したのかよ！」

「当たり前じゃない！あたしゃ田辺舞花だよお？」

いや知ってるから！

「そんなとこいないで中入って！おじさまもおばさまも早く！」

「いま行くよお〜！」

「舞花ちゃん。飲み過ぎちゃダメよ！」

いや飲んでることを注意しろよ！一応未成年だぞ！

「早く！慎くん！」

ったく。しょうがねえやつだな。

「はいはい。」

俺は笑いながら店に入ってしまった。

「いっつもいっつも！人に迷惑をかけることしか考えないで！」

うわぁ…まだあの2人怒られてるよ。しかも風神さん酒入ってるし。

風神さんがいるテーブル付近には酒瓶が10本はあった。

「あんた達はいっつもいっつも！人に迷惑をかけることしか考えないで！」

「慎く助けてくれえ！もうこの話し10回目なんだよお！」

お気の毒に。

「人の話しはちゃんと聞く！」

パァン！

風神さんがニーグさんの頭を思い切り叩いた。ニーグさんは泣きそうな顔でこっちをみていた。

「よし！そろそろお開きにしようか！」

シリアさんがいい。打ち上げお開きになった。時間は深夜の2時になっていた。

「やだあゝ！」

「やだじゃないだろ！」

「あんた達は朝まで説教よ！」

風神さん酒癖わるっ！

「私はどうせ独身なんだから遅くなろうと関係ないし！」

悲しいこと言わないで下さいよ！

「ほら！帰るぞ！」

「うゝ！」

「おんぶしてやるから！」

「じゃあ帰る！」

即答かよ！

「じゃあ帰るか。」

「うん♪」

「じゃあおじさん達も帰るなあ」

店の前には親父とお袋とアンディさんがいた。

アンディさんいたのかよ！

「おやすみ。慎、舞花ちゃん。」

「ニীগさんいないで帰れるのか？」

「源さんがいるから大丈夫よ。」

「そうか。源さんによろしくいってな。」

「ええ。じゃあお父さん帰るわよ。」

「はいはい♪」

「デハマタチンサン！」

最後まで名前違ったままかよ！

親父達は源さんと一緒に光に入っていた。

「ほら舞花！入り口出して！」

「はあい♪」

舞花が手をかざし光出しそのなかに入っていた。

「疲れたねえ♪」

「だなあ。なんか時間が長く感じたし。」

「だって作者が書くのサボるんだもん！」

作者てめええ！

「まっ30話いったしいじゃん♪」

そうゆう問題！？

第31話..おかしなバイト!

「うーん、まずいな。」

俺は学校で俺は家計簿とにらめっこしていた。

「どうしたの? 慎くん?」

「金が足りない。」

「なんで!?!」

「なんでだと? 原因はお前の食費と服代だあ!」

「ひゃっ!!」

そう、こいつはいままで話しにはでなかったがこいつかなりメシを食う。軽く俺の倍を食い当然のように食費も倍になったのだ。

「でっでも食欲の1年ってゆうじゃん!」

なにそれ!?! 聞いたことないですけど!?!

「聞いたことないから!」

「霊界では言ってたもん!」

ここは現世だろうがああ!

「はあゝ。まあいいや今日だけ日雇いで稼いでくるから帰り遅くなッから。」

「バイトするの!？」

「ああ。裕香のところでしてくるよ。」

「裕香ちゃん店なんかやってんの？」

「んゝ駅前にある怖い兄さんがたこ焼き焼いてる店あんだろ? あそこでやる。」

「うわあゝ慎くんヤクザだったんだあゝ」

「違うわ!!」

「うちもやりたい!!」

「やめてくれええ!!」

「一応聞くけど、なんで？」

「面白そうだから♪」

「やっぱりねえ……」

「ダメだ!」

「けちい!」

……このパターン前もあったような……

バイトさせない。

←
素直に応じる。

←
俺バイトする。

←
舞花霊体でくる。

←
めっちゃくちゃなことする。

←
なんかしらで俺のせいにする。

←
俺の小指が飛んでゆくorヤキいれられる。

……まずい！非常にまずい！小指がとんでくことはなくても確実にヤキはいれられる！

「やっぱりこい！」

「いいの！？やったあ♪」

小指が飛ぶよりマシだ！

そして放課後俺達は屋台に向かった。

屋台の中には20代半ばで茶髪のいかつい顔をした男の人がいた。

「竜さん！お久しぶりです！」

「おお！来たか！慎の字！」

「そりゃ来ますよ！」

「そっちの嬢ちゃんは誰だ？」

「慎くんの許嫁の田辺舞花っていいですよ！私もバイトしたいんですけどいいですか？」

珍しいな。こいつが礼儀正しくするなんて。

「やるねえ！慎も！じゃあ説明だけすっからこっちきな！」

「はっはい！」

「とりあえず慎は適当客さばいといてくれや！」

「分かりました！」

それだけ言い残して後ろの事務所に入っていった。

遅い！一体あの二人はなにしてんだ！

「あっはっはっ！」

！！？

事務所の窓から笑い声が聞こえてきた。

「このアニメマジウケる！」

働かんかあい！

「だろだろ！まじウケンベ！」

あんたもなにしとんじやああ！

「くらああ！なにしとんじやああ！」

！！？

テレビに変態人間がゆく！の文字が出ていた。

「おおゝ慎の字もみるかあ！？」

「なんすか？このアニメ？」

「変態人間がゆく！ってやつだ！もう屋台閉めてお前もみろ！」

とりあえずその言葉に従い電気消し材料をしまい事務所に入った。

「早くマトモになりたあい！」

〇ムのパクリじゃねえか！

「ふん！所詮貴様は女がいなきや存在する意味はないのさ。」

酷いな！仲間！

「違う！僕は男でもいける！」

怒るとこちげえだろ！

「まあまあ！ケンカはやめてよ！二人とも！」

「パムしか味方がいないよお」

胸に顔を埋めんな変態！

「うふふ♪それ以上胸触るとスプーンで目玉抉ってホースでジャバジャバ洗うわよ？」

女こわっ！ってかこれ子供向けアニメだよな！？

「ひっ！！」

「ほら早く進まないとマルダーシ大王のパシリがくるわよ！」

ラスボスの名前最悪だろ！ってかパシリかよ！

ヤバイ！このままじゃ頭がおかしくなる！

「竜さん！晩飯の準備とかあんでそろそろ帰らせてもらいます。」

「ん？そうか！今日はあんがとな！」

いやほとんどアニメみただけですから！

「じゃあ私も帰ります！」

「そうか！じゃあまた手伝ってくれよ！あとこれ今日のバイト代！」

「ありがとうございます！」

「じゃあ気をつけてな！」

「お疲れ様です！」

「じゃあ失礼しまあす♪」

俺達は事務所をでて家に向かった。

「慎くんツ○ヤ行こ♪」

「なんで？」

「変態人間がゆく！を借りるから♪」

やめてくれええ！

第32話：個性的な転入生！

「慎く〜ん！」

「どしたあ？」

朝の学校。ホームルームまでボートとしていた俺の所に舞花が来た。

「今日転入生が来るんだって♪」

この時期に珍しいな。

「ふうん。」

「慎くんテンション低いよ？」

朝からおまえが高すぎなんだ！

「そうでもねえよ。」

ガララッ。

「あっ！先生来た！」

「席つけえ〜」

その声で立ってたやつらが席に戻っていった。

「え〜知ってると思うが今日からうちのクラスに転入生がくる。入

ってきなさい。」

入って来たのは茶髪で肩までのショート顔立ちが整った女の子だった。

「鈴木 真衣香です♪よろしくおねがいします♪」

「「よろしくおねがいします!!」」×無数の男子

こわっ!

「え〜とじゃあ席はあ。」

ギロツ! ジツ!

「え〜と……」

おいおい。先生困ってるよ。

「せんせえ〜私の隣空いてますよ♪」

「おっ! じゃあそこで!」

なにやってんだああ!!

ちなみに舞花は俺の後ろだから俺は転入生は斜め後ろの席になる。

ギロツ! ×無数の男子

ああ…俺の平和が去ってゆく……

そして現代文の授業が始まりお互い自己紹介を始めていた。

「よろしくね♪私田辺舞花♪」

「よろしく♪うちと同じ名前なんだね♪」

「そうだね♪」

俺に話し振るなよ？

「っで！前にいるのが私の婚約者の慎くんだよ♪」

ぶはあ！やっぱり言いやがった！

「ええ〜！？もう婚約者いるのお！？」

そりゃ驚くよなあ〜

「うん♪それより私達なんて呼びあおうか？」

「1号2号とか？」

アホか！

「いやっ無難にワン、ツーは？」

もっとアホがいた。

「う〜ん。そうしょっか♪」

なんかこいつ個性的だなあ…

「生田くん♪」

「んっ？」

転入生に呼ばれて振り返った。

「うちのことなんて呼んでくれる？」

うーん。なんかもういろんなところから冷たい視線浴びて返しようがないんですけど。

「鈴木だな。」

「えー。」

「慎くんひどおい。」

なにが！？

「じゃあなんて呼んだらいいの？」

「まいちゃんとか♪」

そんな呼び方したら明日から学校これませんから。

「却下。」

「え〜」

「そこっ！しゃべってないで話しきけ！」

現代文の教師に見つかり注意を受けた。

「ん〜君は転入生だね？もう少し大人しく授業受けたらどうだ？」

嫌味が始まったよ。

鈴木横にきてネチネチ小言をいい始めた。

そして鈴木が立ち教師の耳元で何かを囁いた。

すると顔真っ青にして教師が教室から出ていき。その時間は帰って来なかった。

何言ったの！？

「すごおい！まいか2♪」

ホントに呼んでるよ！

「ありがとう♪」

———昼休み———

「そういえばまいか2はどこ住んでるの？」

「えっとねえ〜××町の○○の△―◇―□だよ♪」

「うちの近くじゃあん♪」

「ホントにいい？」

「だよな？ 慎くん♪」

「そうだな。」

……そういえば一昨日うちの向かいが引っ越しの挨拶に来たような……まさかな……

「そういえば向かいの人も生田って名字だったような……」

「ホントにいい！？ 一昨日うちに引っ越しの挨拶きた？」

「いったよお♪」

俺の平和返してくれえ！

「じゃあ今日は一緒に帰ろうね♪」

「だね♪」

「慎くんもだよ♪」

「いや俺はシゲと約束が……」

「ダメ！」

拒否権なしですか！

「わかったよ。」

この後俺はほぼ全ての男子に睨まれ帰る頃には精神的にやられていた。

「あゝ楽しかった♪」

「だね♪まいか1♪」

俺は最悪だ！こんちきしょー！

余談だが：現代文の教師は次の日

「都会が怖い」といって辞表をだし学校をやめたらしい。

なんかもう最近メチャメチャだな……

第33話..キャットな1日!

「にゃっ にゃっ にゃー (たすけてくれえ!)」

「まてえゝバカ猫ゝ」

「にゃっ にゃー (てめえ!あとで覚えてろ!)」

「にゃー (やつとまけた...)」

気付いてるかもしれないがいま俺は猫の姿になっている……事の発端は1時間前……

「……………舞花、これはなんだ?」

「キャットフード♪」

「なんであるんだ?」

「慎くんが食べるため♪」

なんで!?

「誰が食べるつつった?」

「慎くんが食べたそうな顔してたじゃん♪」

してませんけど!?

「するわけねえだろお!」

「ひゃっ!!」

「ただでさえ今月は苦しいのに何買っとんじゃあ!」

「だってえく……あっ♪そうだ♪」

うわぁ……やな予感…

「慎くんを猫にしちやえばいいんだあ♪」

はい?

「えい♪」

ポン!

「にやにやー!? (なんじゃこりやああ!?)」

舞花が指を振ってから俺を指さすと俺の視界低くなり手には灰色の毛がびっしり生えていた。ついでに言葉も話せなくなっていた。

「これがうちの第6の能力、変化だよ♪これは詠唱なしでできるんだあ♪」

「にやー (んなこた聞いてねえ!)」

「はい♪キャットフード♪」

食うか!

「にゃー！にゃー！（もとに戻せえ！）」

「ほら早く食べなよ♪」

「にゃにゃー！（食うかああ！）」

ちくしょお！どうする！？そうだ風神さんなら！

そうおもしろい携帯を開きなんとか風神さんに電話をした。

「もしもし。」

「にゃつにゃー！（風神さん！助けてください！）」

「猫？おっかしいわね。慎くんからの着信だったのに。」
「そうだ！しゃべれないんだった！」

「（いたぞお！捕まえろお！）全員囲んで！今日とゆう今日は許さないわよ！」

なんか大変なことになってるなあ……

「あとで掛け直すわね！」

プープー……

最悪だああ！

「慎くん？観念した？」

やばいっ！このままじゃ人間を捨てることになる！

「にゃー！（脱出！）」

「あっ！までえ〜！」

………でっ、現在に至ります。

「にゃー（マジでこれからどうしよお…）」

「にゃっにゃー（おめえ、誰だ？）」

誰！？

上を見ると毛がボサボサの三毛猫がいた。

「にゃー（あんた誰？）」

猫の言葉分かるようになってるよ！！

「にゃっにゃにゃっにゃー（俺はこの辺しきってるリクだ。おめえは？）」

「にゃにゃー（俺は慎だ。）」

「にゃーにゃっにゃっ（聞かねえ名前だな。新入りか？）」

「にゃーお（今日限定のな。）」

「にやっにやにや（なるほど流れか。来い。シマに案内してやる。）

猫にナワバリってあんだなあ……

そして俺は言われるがままにリクについていった。

「にやっにや（ゆっくりしてきな。）」

家の近所の公園の人の行かないすみの所に猫が20匹ほどたまっていた。

「にやっにやー（はあゝなんでこんなことになったんだか。）」

「にやっにやー（聞いたあ？3丁目の生田さんの話し？）」

ん？うちの話し？

3丁目の生田といえbaumちしかなく、その話しを猫がしていた。

「にやにやー（聞いたわあゝ許嫁でしょおゝすごいわよねえゝ）」

うわあ……猫にまで広まってるよ……

「にやっにやにや（あのどら息子がねえゝ）」

くらああ！！誰がどら息子じゃああ！

「にやー（ほんとよねえゝ許嫁さんも可哀想にね。）」

可哀想なのは俺だ！！

「にゃーにゃー（きつとお先真っ暗よ。）」

今の俺がお先真っ暗だわ！

なんで猫にけなされなきゃいけないのじゃああ！

俺は居づらくなりその場を後にしようとした。

「にゃっにゃー（行くのか？）」

「にゃっにゃにゃ（ああ。世話になった。）」

「にゃにゃー（そうか。気を付けろよ。）」

「にゃっにゃ（ああ。じゃあな。）」

そうして俺は公園をでた。

あゝこれからどうしよお……

おれはあてもなく家の周りをうろついていた。

ピカッ！

うわっ！なんだ！？

目のまえには水の入ったペットボトルが置かれていて何故かそれを怖く感じた。

……なんかホントに猫になってるよおれ……人間に戻るのか？

ドオン！

「ぎゃああ！」

なんだ！？

家の中から叫び声と何かが落ちる音がした。

「にゃつにゃー！（誰だぁ！？）」

俺は音がした居間に走っていった。

「イテテ：着地失敗しちゃったよ。」

居間には壊れたちゃぶ台とニーグさんがいた。

「にゃー！（ちゃぶ台があぁ！）」

「おっ！慎の家猫飼いだめたのか！」

違うわ！

「ほおれ！こいこい！」

「にゃにゃー（俺ですって！ニーグさん！）」

「こねえなあ。これならどうだ！」

そういうとニীগさんは手から猫じゃらしを出し俺の目の前で振った。

「にゃにゃにゃー（なんだ体が勝手に動く！？）」

俺の意思とは関係なく体が猫じゃらしを追っていた。

「やっぱり猫には猫じゃらしだよなあー！そんな楽しいかあ。」

俺は人間だああ！こんなの楽しくねえよお！

「あっ♪ニীগさん♪」

「おっ！舞花！」

「あっ！慎くん！」

「慎？どこにいるんだ？」

「今ニীগさんが遊んでるじゃん♪」

遊んでねえ！

「はっ？こいつは猫だぞ？」

「だからあゝ私に変化させたのおゝ」

「これが慎？ぶっ！うあっはっはっはっ！」

笑うなああ！

「そおかあ！おめえ慎だったのかあ！可哀想になあゝ！」

そう思うなら戻してください！

「今戻してくださいって思ったろ？面白いからやだね！」

ふざけんなああ！

「慎くん食べる気になったあ？」

食うか！

「にやにやにやにやー（お前らふざけんなああ！）」

「何言ってるんだあゝ？うあっはっはっはっ！」

なんでこの人が霊界のトップなの！？

ふとニーグさんの後ろを見ると鬼のような形相をした風神さんが立っていた。

「うあっはっはっはっ！ん？」

「見つけたわよ…」

「風神！？」

「あなた私の背中にこの紙張ってしかも私の扇に同じ落書きしたでしょ？」

風神さんの手には

「風神だっぴょん♪」と書かれた紙があった。

うわぁ…小学生のイタズラじゃん……つか風神さんも気付こうよ
……

「いや…それは…その…雷神だ！」

雷神さん売りやがった!!

「さっき雷神捕まえたらあなたがやったって言ってたわよ？」

「あの野郎!嘘つきやがって!とっちめてやる!」

そういつてニーグさんは霊界への光出し入ろうとした。

ガシッ!

「逃がさないわよ！」

「やっぱだめ？」

「当たり前でしょ！」

パン!パン!ビュウウ!ドオン!

部屋が壊れるう!

「ぎゃあぁ!」

風神さんは扇で顔を叩き更に風でニーグさんを飛ばし気絶させた。

「にゃにゃー（風神さん…その辺でやめてください。）」

「慎くんも大変ねえ…今戻してあげるから。」

ポン！

風神さんが指を振り俺を指さすと俺は猫からもとの姿に戻った。

「やつともどれたああ！」

「つまんないのお！」

もっかい死なすぞ！こんちきしょう！

「じゃあ私は帰るわね。」

「ありがとうございます！」

「バイバイ！風神さん！」

そうして風神さんは霊界に帰っていった。

「慎くん！」

「ん？」

「今度はドックフード買って来たの♪」

ふざけんなあ!!

第34話：焼き肉パーティー！（前書き）

ずっと更新してなくてすいません←←忙しかったもんで←←これからも更新遅くなるかもしれませんがどうか温かい目で見守って下さい。

第34話：焼き肉パーティー！

「慎くん！焼き肉食べたい！」

「はあ？？」

「だから焼き肉食べたいのお」

「そんなお金うちにはありません！」

こないだから言ってるが今うちの家計簿は赤字だらけだ。それもこれも舞花の食費によるものだ。

「じゃあみんな呼んでやろ？？」

人の話し聞いてましたか？？

「金がないつつうの！大体誰呼ぶんだよ！？」

「しげくんとゆりちゃんと裕香ちゃん♪」

お前は俺を殺す気か！？

「だめです！！」

「いいもん！もう呼んだから！」

だだこねた意味ねえじゃん！

ピンポン♪♪お客がきたでえ〜

!!? なに今の!?

「やったあ♪改造成功♪♪」

「インターホンに何をした!?!」

「霊界で流行りのオッサンインターホンに改造した♪の♪」

「今すぐ元に戻せええ!!」

「やだあ! 56万もしたのに!」

高っ!!

「返品しなさい!」

「やだあ!」

「おい! 返事ないから勝手に入ったぞ。」

「あっ! しげくん♪」

「どしたの舞花ちゃん?」

「慎くんがいじめるの!」

俺はお前にいじめられとるわ!

「ダメだぞ！女の子いじめちゃ！」

ピンポーン♪客がきたでえ〜ピンポーン♪客がピンポーン♪
客ピンポーン♪客がきたでえ〜

うっというわああ！

「あははは！慎の家のインターホンおもしろすぎ！」

「何を考えてるのやら……」

「よう……ゆりに裕香」

「どうした？元気ないぞ？」

「ほんとだあ〜元気だけが取り柄の慎なのにい〜」

それはしげだっ！！

「ちょっとツツコミ疲れしただけだ。」

「なにそれえ〜？？変なの！」

ゆりには言われたくないから！

「それよりほら！！お肉たくさん持ってきたよ♪」

「ありがとう♪ゆりちゃん♪」

「金払わなくていいのか？」

「いいよお♪」

「私のおごりだ。金は払わなくていいが……舞花のことをしっかり話してもらおうぞ……」

狩人の目になってやがる…

「あっ……ああ……」

「準備できたぞお！食べようぜ！」

「食べよお♪」

「わかった！」

「舞花。」

「んっ？なあに？」

「お前が幽霊だってこと絶対バラすなよ！？」

「なんで？」

「まともな話しにならないから！」

「うーん……わかった……かも！」

かもっ！？

「焼き肉だぁ♪」

「あっ！こらっ！待て！」

自由すぎるだろ…

「では今から第一回焼き肉パーティーを始めます！乾杯！」

「「かんぱあい！！」」

———5分後———

「酒がたらぁん！！」

はやっ！！まだ5分しかたってねぇぞ！？

床には既に裕香が飲んだ空のジンロボトルが転がっていた。

「っで舞花はいつからしんと知り合いなんだ？」

「んっとねえ、慎くんが6才の時から知ってるよぉ♪」

そんな昔から！？

「ほう。どうやって知り合ったんだ？」

「んっとねえ、この辺浮遊してたらまたま慎くん見つけてからかってやろうとしたのがきっかけかなぁ」

最悪じゃねえかああ！つか今明らかに浮遊とか言いやがった！

「浮遊？」

「私もとは幽霊なんだよ♪」

カッチーン……………

空気が凍ったよ……………どうしよう……………

「……………」

「……………」

「……………」

「舞花ちゃんの冗談つまんないからあ♪」

「ほんとだよ♪このお札を体から離すと……………」

スウウウ……………

見事に体が透き通ったよ……………つかみんな見えてないし……………

スウウウ……………

「ほら体消えたでしょ♪♪」

「「うそおお！！？」」

「本物!？」

「なっ!？」

「女湯のぞきほうだいじゃん!」

くらあぁっ!どさくさにまぎれて何いっとなんじゃあぁ!!

「ってことは慎の許嫁は幽霊!？」

「幽霊と結婚!？」

小説のタイトルパクんな!

「慎……貴様も幽霊にしてやろうか……?」

なんで!?!どこにキレルポイントあったの!?

「まっ……待て!裕香!」

Z Z Z Z : Z Z Z

寝たのかよ!

「慎も大変だなあ」

そう思うならなんとかしてくれ!

「慎はモテるねえ」

舞花だけだろ！

そんなこんなで真夜中になりとりあえず居間で雑魚寝することになった。

「慎くん…バレちゃったね♪」

お前のせいだろ！

「まあいつかはバレることだからいいよ。」

「そっか！じゃあうち寝るね♪おやすみ♪」

「おやすみ。」

「慎！」

「どうした？ゆり。」

「舞花ちゃんほんとに幽霊なの？」

「ああ。そうだよ。」

「あのね……言おうか迷ってたんだけどさ……うち見たことあるの……」

「何を？」

「舞花ちゃんを……」

「いつ？」

「10年前の新聞で……」

「はっ!？」

「連続殺人事件の記事で被害者で舞花ちゃんがのってたの……」

嘘だろ……

「その犯人がねまだ捕まってなくて指名手配されてるの……」

「そいつの名前は？」

「石倉 泰弘……」

「嘘だろ……」

「ほんとだよ……2年前絵梨ちゃんを殺したあいつだよ……」

「そうか……あいつか……」

「多分図書館いけば調べられるから明日調べてくるね。」

「わかった。わりいな。」

「ううん。じゃあおやすみ。」

「おやすみ。」

あいつが舞花を殺したのか……変な縁だな……

俺はそう思いながら居間に行き寝る準備をしてる途中突然裕香が叫んだ。

「明日が貴様の命日だ！ 慎！」

俺！？ つか寝言だよな！？

「嘘だ！」

嘘かよ！ つか珍しくシリアスな雰囲気だったのにオチがあんのかよ！

第35話：質問コーナー！

「なんだこれ？」

「慎くん！なにここ！？」

「はい！二人とも落ち着いてえ！」

俺達はいま何故かなんかよくわからん何もない真っ白な部屋にいる。

「あゝ！ダメ作者！」

「ひどいっ！」

「ここはどこだ？」

「ここはねえ、俺が質問部屋として作った空間だよ！」

「質問？」

「んつとねえ、なんか評価じゃなくてメッセージの方にくつか質問来たからここで答えちゃお！みたいな感じで！」

死ね！クソ作者！

「面白そう！慎くんやろっ！？」

「やだ！」

俺はいきなりこんなとこに連れてこられたうえ質問攻めと聞いて機嫌が悪くなっていた。

「そんなこといわないで♪最初の質問ね♪H・N・紗英さんからどうやったら舞花ちゃんみたく料理上手になれるのですか? (笑) 彼氏に手料理作ってあげたいんです!」

いきなりすげえ質問だな! つつうか (笑) をつけてる時点で確信犯だろ! 彼氏を殺す気か!?

「いきなり舞花ちゃんへ質問だあゝ舞花ちゃんどうぞ!」

「私と同じ恋する女の子だあ♪ポイントはねえゝこれだよ!」

そうゆうと舞花は小瓶を具現化した。

「これはバルサミコ酢かな?」

「ううん! アカリ酢だよ!」
なにそれ!?

「これをバルサミコ酢と混ぜるとすごく美味しいんだよ!」

そうか……不味さの原因はそれか……

「でも比率間違えると爆発するから気を付けてね!」

普通料理は爆発しませんから!

「はい! ありがとうございます! あゝでは次の質問です! H・N・

りんごちゃんさんからです！慎くんはなんでツツこみ上手なんです
か！？あと慎くんみたいなお嫁さん欲しいです♪はい！慎くんどう
ぞ！」

「え〜つと…とりあえず今回は声にだしてツツこむけど…俺は
男だ！ってかあんた女だろうがああ！そして好きでツツこんでねえ
！」

「む〜ライバルだあ〜」

アホか！

「おいしいねえ〜ツツこみにキレがある！」

うるさい死ね！

「つでなんでツツコミ上手なの？」

「まわりをみりゃわかんたろ！アホな親父にアホなツレんでアホな
同居人そりゃうまくなるわ！」

「はい！どおもありがとうございましたあ〜」

流すな！

「ね〜なんでいきなりこんな質問コーナーなんか作ったの？？」

確かにそうだな……………まさか……………

「ネタ尽きたんだろ？」

「うっ！」

「ネタ尽きたから質問片付けて更新できて一石二鳥だと思ったんだろ!？」

「いやっ……それは……その……」

「最近更新してなかったもんなぁ〜おかげで夏休み明けから時間進んでねえしなぁ〜」

「いや……それは……あっ! まだ一個質問あったんだ! え〜とH・N・要さん」

「話をそらすなぁ!」

「慎くんは舞花ちゃんのが好きなんですか!？」

「……………」

「……………」

「……………の?」

はい??

「慎くんは私のこと好きなの!？」

「えっ…………いや…………」

「どっち!?!」

「それは……その……」

ふざけんなああ! なんでいきなりこんな質問きてんだよ!

「ねえっ!」

「まあ……その話しはあとで……」

「今がいい!」

目が怖いって!

「好きじゃなきゃ一緒に住まないから安心しなよ舞花ちゃん♪」

なに言ってやがるクソ作者!

「ほんとにいゝゝ!?!? じゃあ子供ほしいゝ!」

ふざけんなああ!

「どうぞ♪×2」

「じゃあ帰るよおゝ♪」

「はいはい♪おつかれさあん♪」

いやまてって! なにこのオチ!?

「頑張ってねえ」

頑張るわけねえだろお!!

「ほら早く帰るよお！」

ちよっ! マジ勘弁してって! なにこの話しこれで終わり!? ちよつとマジないって!

「今夜は寝かさないよお♪」

助けてくれええ!!

第36話：皆でカラオケ！（前書き）

なんかもう……ほんと更新遅れてすいません！！

第36話..皆でカラオケ!

「ねえ〜慎く〜ん」

「どうしたあ? 舞花。」

「暇だね。」

「確かにな。」

今日は日曜で学生らしく昼まで寝てたがやることがないな。

「じゃあ洗濯と掃除するか。」

「やだ!」

即答ですか……

「お出掛けしよ!」

いきなりだなオイ。

「どこに?」

「地獄巡り♪」

ふざけんなああ!

「絶対やだ!」

「え〜」

「んじゃ親父達から仕送りきたしカラオケでも行くか」

「行く〜！じゃあ裕香ちゃんとゆりちゃんと2号とシゲ君も！」

2号？ああ転校生か。

「今2号のこと忘れてたでしょ？」

「気のせいだ！」

なんでわかったの！？

「まあいいけど……後悔するぞ？」

「なにが？」

「行けば分かる」

――1時間後――

とりあえずみんな集まり俺達はからおけ〜とかいうふざけた名前をしたカラオケにきている。

まあ安いからいいんだけどさ。ああ。ちなみに鈴木はもう裕香達と仲良くなってるんだよね。あいつらどんだけ人見知りしないんだか。

「うわぁ〜安いわりにはきれいだねえ〜」

「ここの店長がきれい好きだからな」

「では私からいかしてもらおう。」

一番最初は裕香で流れてきたのは……長○剛のと○ぼだった

渋っ！女が○渕は渋すぎだから！しかもうまつ！

得点は……99！？ほぼ満点じゃん！

「まあこんなものか。」

「「裕香ちゃんすごいい！」」

おまえらどんだけ仲良いんだよ！どこぞの双子芸人か！？

「うまいね〜じゃあ次わたしいく〜」

次にいったのはゆりで女子高生らしく大○愛のさ○らんぼだった。

ゆりもなかなかうまいな。なんで女はあんな声が高いんだか。

「ゆりちゃんもうまいねえ〜」

「だねえ〜♪次はだれえ？」

「次は俺だ。」

「慎くんだぁ♪」

「かつこいい〜ちゅ〜してえ」

殺すぞシゲ！

ちなみに俺は○ンプで天体○測だ。
古いつてゆうなよ？

「かつこいい〜！」

「うまあい♪」

「下手くそ〜」

うらああ！殺すぞおお！

そんなこんなで歌い得点は86だった。けっこういったな。

「次は俺だ！」

きたな……

「おい！二人とも！死にたくなきゃ耳ふさげ！」

「ふえっ！？なんで！？？」

「慎さん。どうゆうことですか！？」

ああ……もう始まる……とりあえず俺は塞いでるからいいけど……

「にやあああ！！！」

「きゃ〜〜!」

シゲの歌はデスソングと呼ばれ声がでかくとてつもない音痴だから直に聞いたらそりゃあもう……W舞花と同じ目に会う。ちなみに歌ってるのは○ルノのヒ○リノ夜だが下手すぎて叫んでるようにしか聞こえない。

得点はもちろん0点。

「なんだよこれえ〜壊れてんじゃねえの??」

ああ…そうかもな…お前のデスソングで壊れたのかもな……

「0点なんて初めてみたよ!」

「私も!」

「私達はシゲのおかげで見慣れてるよお♪」

見慣れるのもどうかと思うけどな……

「じゃあ次は私達だよ♪」

「チーム名まいかー! S2005よろしく♪」

アホか!

流れてきたのは……ん〜どっかで聞いたことあるな〜

「○FO!」

古っ!! ってかなんでこいつらこんなの歌えるんだよ!?! っつーか二人とも上手いな!!

「きゃ〜〜かわいい!!」

「つきあってえ〜〜!」

アホか!

「私にも喋らせろ!」

なんかすいません……

何だかんだ盛り上がり結局5時間以上滞在し今月分の小遣いがかかりとんでしまった。

「また行こうね♪シゲくん抜きで♪」

ひどいなオイ! まだ隣にシゲいるぞ! あっ泣いてる。まあほっとくか。

「シカトすんなよお!」

「いやだってダルいし。」

「うわああん! ぐれてやる! 髪染めてタバコ吸ってやる!」

「元々だろ。」

「そうだあゝヤニ臭いぞおゝ」

「臭いぞおゝ」

うわあ……W攻撃喰らってるよ……

「決めた……俺禁煙するわ！」

いや軽いな!!

「つつーわけで協力宜しく！」

「はい!？」

「じゃあそうゆうわけで!また明日!」

いやっ!ちょっと待ってっ!何協力って!?!何をしろと!?!オイイ
イ!!!

「やったね♪次の話の伏線ができたじゃん♪」

そうゆう問題じゃねええ!

第37話：シゲの禁煙！

「慎の字、頼まれた物を持ってきたぞ！」

「ああ。ありがとう！」

今日はシゲが禁煙をするから裕香に禁煙グッズをいっぱい持ってきてもらった。

「パイプにニコ○ツトに葉まゝこんなもんか。」

「しかし、シゲもどうゆうつもりで禁煙なんかするんだ？？」

まあ当然の疑問だな。

「舞花たちに臭いって言われたのがショックだったらしいぞ。」

「ふむ。確かにシゲだったらあり得るな。」

「そうだなあ。それにしてもシゲ達おせえなあ」

ちなみに今舞花がシゲ来る途中にタバコを吸わないように迎えに行っている。

ドッカーン！

「ぎゃあああああー！！」

何事！？

玄関に行ってみると黒焦げになったシゲとそれを笑いながらつつく舞花がいた。

「ま、舞花…何があった？」

「ん…？シゲくんがタバコ吸わないようにライターをライター型爆弾とすり替えといったら玄関の前で吸おうとして爆発した♪」

いやこれは死んだだろ？！つか玄関の前で吸うって禁煙する気ねえだろこいつ！

「シゲ！生きてるか！？」

「危篤状態だ…」

うん。危篤なんて自分で言わないよね普通。

「そんなこと言えりゃ十分元気だ。」

「あっ！ひどい！」

「はい♪シゲくん♪これあげる♪」

「いや…もういらないです…」

トラウマになってるよ…

「何があったんだ！？」

なんでそんな遅れての登場なの！？

まあそんなこんなで禁煙始まったんだが。

「我慢できねえ～～！」

こいつ意思弱すぎ！！

「シゲ！落ち着け！」

「そうだよお～～まだ2時間しかたってないよ～～」

「2時間だよ！？すごいじゃん！」

いやなにが？

「じゃあそろそろ私が持ってきた禁煙グッズの出番だな。」

道具その1 禁煙パイプ

「とりあえずこれを吸ってろ。」

「ん～なんか物足りない。」

「ワガママ言うな。」

「慎くん眠い」

飽きるの早すぎだろ！？

「腹が減ったぞ！慎の字！」

あつ。こいつら協力するきねえな。

「んじゃメシにすつか。」

昨日は焼きそばだったし今日はお好み焼きでいいや。

俺は台所に適当に準備を始めた。

「ん〜キャベツと豚肉とキムチでいいかなあ。」

「うおおおお！！」

なに！？追○者！？それともタ○ラントか！？

居間に行くとなぜかシゲが発狂していた。

「どうした！？」

「なんかシゲくんがいきなり叫びだしたの！」

「タバコオオオオ！！」

どんだけ依存してんだよ！？

俺達が呆然としてると裕香がシゲの耳元でなにかを囁いた。するとシゲはおとなしくなった。

「すみません……暴れないから売らないで……」

なにを言ったの!?

「分ければよろしい」

いや恐ええから!何言ったのかすげえ気になるし!

「えーっと…とりあえずメシの準備できたからその辺片付けといて。」

「はーい♪」

「あいよ。」

「了解した。」

さて後はホットプレート用意しなきゃな。

俺はホットプレートをもって居間に行きみんなでお好み焼きを焼きながら昼メシを食べた。

「ごちそうさまぁ♪」

「うまかったぞ。」

「慎の字は料理が上手いな。」

「そりゃどうも。」

「わかったぞ!」

何が!?

「パイプに足りないのは煙だ!」

……………ガン!!

「いってえゝ何すんだよおゝ」

「パイプから煙がでるかああ!」

「じゃあ次はこれを使ってみろ。」

道具2 薬

「これなんの薬?」

「飲めばわかる。」

「わかった。」

ゴクツ。……………ボタン!!!!

「どうした!?!」

「大丈夫!? シゲくん!?!」

「なに飲ませたんだ!?!」

「睡眠薬。」

いやアホだろ!

「これならタバコ吸わないだろ？」

そりゃ寝てるからな……でも禁煙ではないよ？

「裕香ちゃん！私にも頂戴！」

いや何に使うつもりだよ！？

「あげてもいいが何故だ？」

「んっ色々あるの♪」

「まあいいだろう。」

用途不明なのにあげるなああ！！

———3時間後———

「ふああああ……おはよ。」

ようやくシゲが目覚め俺達はその間トランプをやっていた。

「はい2をだして8出して1で上がり。」

「じゃあ私も2出して1で上がり♪」

「貴様ら強すぎるぞおお！」

裕香……弱すぎだぞ……

「俺のタバコしらない？」

禁煙中だろ！バカ野郎！

「はい♪」

何渡してんの！？

「ありがとう」

カチッ！ボオオオン！！

「ぎゃあああああ！！」

爆発したああ！

「ダメだよ？吸っちゃ？」

いや悪魔か？お前は？

「次はこいつを試してみろ。」

道具3 ニ○レット

「これマジよ」

「仕方ねえだろ。」

「我慢だよお♪」

「慣れれば平気だろ。」

「うゝん。」

「ちなみにこれいくら？」

「1ヶ月ぶんで6000円くらい」

高っ！

「マジで!？」

「マジだ。」

「ところで今何時？」

「4時半だが。」

「やべっ！バイトだ！わりいそろそろ行くわ！」

「ああ、わかった。」

「二〇レットだけもらってくわ！じゃあな！ありがとな！」

「がんばってねえ♪」

「じゃあ私も帰るとするか。」

「ああ。気を付けて帰れよ。」

「私を襲う奴がいるなら私の銃が火を吹くな。」

うん。そこらの犯罪者よりよっぽどこわいよね。

「じゃあ今日は私がご飯作るね♪」

ちよつとまたんかい！

「いや俺が作るよ。」

「いや私が作るよ♪睡眠薬の効果を……」

くらあ！

「やっぱ俺に使う気だったんかい！」

「えへっ♪」

えへっ♪じゃねええ！アホかああ！

結局このあと俺が夕食を作りなんとか難を逃れた。

そこで次の日シゲに禁煙出来たか聞くため電話をした。

「聞いてくれよ！」

「どうしたんだよ？」

「二〇レットマジですげえぞ！」

「禁煙成功か？」

「いやあれ食いながらタバコ吸うとめっちゃくちやうめえんだよ!」

禁煙は!?

「…………禁煙できなかったのか?」

「何の話?」

俺の1日返せええ!

第37話：シゲの禁煙！（後書き）

人気投票を開始したいと思います！好きなキャラクターを評価か感想で書いてください！適当に表が集まったら締め切って発表したいと思います！じゃあ皆さんの1票まってまあす！

第38話：慎と舞花の過去！（前書き）

今回シリアスです。

第38話：慎と舞花の過去！

「じゃあいつてくるね！慎くん！」

「あいよ！」

今日は舞花が源さんのところへ行くため家には俺一人だ。

「さて、どうするかな？」

そんなことを考えてたら目の前光が現れた。

舞花のやつ忘れ物でもしたか？

「しゅん！メシ食わせろ！」

「ニーグさん！？」

「おう！仕事めんどいから逃げてきた！」

風神さんにまたボコらるぞ！

「そういえばニーグさんに聞きたいことあるんですけど。」

「なんだ？」

「舞花のことなんですけど」

「なにを聞きたいんだ？」

「あいつ死因といつ死んだかです。」

俺は図書館で舞花のことを調べたが不思議なことにほとんど資料がなかった。でニーグさんか源さんに聞こうと思っていた。

「ふむ、まあ慎ならいいが舞花にはゆうなよ？」

「わかりました。」

「あいつは殺されたんだ。」

「やっぱり…」

「知ってたのか？」

「はい…ツレが新聞でみたことあるって言ってたんで」

「そうか…10年前に連続殺人犯の石倉 泰弘に殺された。場所は森林公園で。」

絵梨と同じ場所か……

「酷い殺されかただった…両手両足を切られ最後に心臓を刺されて殺された。」

「そう……ですか……」

「それが10年前だ。だから生きていれば26歳だったんだ。あいつは母子家庭でな今はこの町にはいないが命日には森林公園に来ているらしい。」

「舞花は会おうと思わないんですか？」

「いや会えないんだ。」

「何ですか？」

「あいつは殺されたショックで生前の記憶がまったくといっていいほどないんだ。」

「そんなことって……」

「だから最初は霊界の行きかたもわからず自分が誰かもわからず現世をうろついていたところを俺が保護したんだ。」

「じゃああの名前は？」

「俺がつけた。」

「舞花に本当のことは教えないんですか？」

「本当のことを話そうとしたら」

（私は私だから生前のことは知らなくていいよ♪今が楽しいから♪）

「だよ。だがいつか生前のことは思い出すと思うぞ。」

「なんでですか？」

「舞花を殺した奴はお前と関係あるからな。」

「知ってたんですか？」

「当たり前だろ！俺は神だ！」

改めてこの人はすげえと思うよ。

「それとな…慎のことについても話があるんだ。」

「俺のことですか？」

「ああ。お前のその強さについてだ。」

「俺の強さ？」

「お前のその強さははっきりいって超人の域に達している。さらに普通生身の人間が霊界になんかいった5分もしないで魂だけになっちまうんだ。」

怖っ！！なにそれ！？あいつそんなことも知らないで霊界に連れてってたのかよ！？

「んで俺が調べたらお前は俺の前々任の神の生まれ変わりだったんだ」

はあ？神？？生まれ変わり？？

「おまえも聞いたことあるだろ全知全能の神ゼウスを。」

「ゼウスってあの神話にでてくる？」

「そうだ。」

「それが死んだのはいつの話ですか？」

「もう4000年はたつ。」

「生まれ変わるまで長くないですか？」

「霊界と現世じゃ時の流れが違うからな。」

「それだけならいいんだが問題がある。」

「問題？」

「ゼウスは戦死だったんだ。4000年前に起きた異界大戦でな。」

「そのどこが問題なんですか？」

「まあ聞け。その時にオーディンで奴とロキって奴が2人がかりでゼウスに挑んだ。結果は3人と戦死。両軍の大將が死にそこで戦争は終わった……表面上は」

「その後なにがあったんですか？」

「この時ロキもオーディンもすげえ恨みを遺してなタチがわりいことに来世に記憶を残したまま生まれ変わったんだ。ここまで言えばわかるだろ？」

「はい。俺のことを見つけて復讐しようとしているってことですよね？」

「そうだ。正確にはもう始まっている。」

「どうゆうことですか？」

「わかんねえか？舞花を殺しおまえの彼女を殺した石倉 泰弘はロキの生まれ変わりだ。」

「そんな……」

「今は警察に追われてどっかの田舎にいるがいつかまた行動を起こす。だから気を付けて行動しろよ。」

「わかりました。あとオーディンはどうなったんですか？」

「あいつに関しちゃほとんどなにもわかっていない。唯一分かるのは慎と同じ年くらいとゆうことくらいだ」

「そうですか。」

「じゃあそろそろ風神が来る頃だから逃げるわ！メシはまた今度食わしてくれや！」

「わかりました！ありがとうございます！」

「んじゃな！」

そういつてニーグさんは光の中に消えていった。

……俺のせいで絵梨が死んだのか…最悪だな…

俺はニーグさんの話しを整理しながら晩飯の準備をしていた。

舞花は何故殺されたんだ？俺とは無関係だったはずなのに：

いくら考えてもわからず晩飯ができる頃に舞花が帰ってきた。

「ただいま！」

「おう！おかえり！」

「やっぱり源さんはいいキャラしてるよ！」

「どうしたんだ？」

「拷問の仕方とか指の詰めかた教えてもらった♪」

うん怖いよね。たのむが実践するなよ？

「んじゃメシにすつか！」

「うん♪」

舞花は絶対に守ってやろう。今度は後悔しないために。

第39話：朝からハジけよう！（前書き）

ほんっとーに更新おそくてすみません！新しい生活が恐ろしいぐら
い忙しくて破壊されました←←

第39話：朝からハジけよう！

おはようございます！田辺舞花でえ〜す♪ついにわたし視点の話しがきたんだよ〜♪なにしょっかな〜？きゃー！もう考えただけで楽し〜♪

なぜわたし視点かとゆうと只今の時刻は午前3時半♪慎くんはまだ寝てるのよねー。わたしは目覚めてつまないからーまあ読者にかまってもらおうかなあーって思ったんだけど……なに話してほしい！？

んーじゃあまずわたしが慎くん好きな理由から〜♪えっ聞いてないって？いいから聞いてよ〜♪

あれは〜わたしが死んでから3年くらい経った頃かなまあいつもどおり暇でこの辺プラプラしてたら当時9才の慎くんとしげくんが遊んでたんだよー♪

いや〜あの頃の慎くんは可愛かった♪おっと思い出したらよだれが。

ッで〜まあ暇だから慎くんに憑いてったわけよ、そしたらまあおじさんとお婆さんが見える人でね、話したら凄いいい人でなんなら慎くんに憑いていいってゆうからずっと憑いてて〜♪

まあそれから今までの7年間ずっと憑いてたんだよ〜？普通なら飽きるんだけどやっぱり愛は偉大よね〜♪もう慎くんがどんどんかっこよくなるんだもん♪見てて飽きないどころか一生憑いてこうって思ったもん♪

顔が良くて性格良くてツツコミできるからもう言うことなしだよ♪
えっ？ツツコミはいるのかって？当たり前じゃん♪

まあそこら辺で好きになったんだけどやっぱ一番は生き方かな。
やりたいことはやるけど他人には迷惑かけないし友達になんかあつ
たら自分のことなんか関係なく復讐したりね♪

いやゝ慎くんは凄いやゝ♪いろいろ辛いこともあったのにそれでも
自暴自棄になったりしないし、うんさすがわたしの旦那だあゝ♪

さてとゝ♪そろそろ外も明るいし慎くん起こそゝつと♪

バズーカー精製♪

カチャッ

ソロソロ

ガチャン！

さゝて皆さんやることはわかるでしょ？いくよゝ♪

3・2・1

「おはようバ〇ーカー！！」

ぼがーん!!

「どわあああ!?!」

「おはよ♪慎くん♪」

ポカーン

見事固まってるよ♪そうゆう人には♪

ギュッ!

「おわっ! 舞花!?!」

「えへへ♪おはよ慎くん♪」

「おまえはなにやっとなだー!?!」

「んふふ♪ちゅー♪」

「アホかー!! とつととでてけー!」

今日も朝から賑やかで楽しい♪こんな日がいっつもでも続きますように♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7742b/>

幽霊と結婚！？

2010年10月28日06時51分発行